

さてもその後、<sup>とらのお</sup>虎尾の桜戸はその宵の間の大雪に<sup>やまそくら</sup>山芋倉の我が住処<sup>すみか</sup>を押し潰されたるにより、五  
六町あなたの<sup>かんのだう</sup>観音堂に退いて、<sup>しがふね</sup>陸船夫婦が目論見たる、既に必死の災いを逃れたるのみならず、  
囚らずも<sup>へたいふ</sup>舳太夫、<sup>くがふね</sup>陸船、<sup>ならくばば</sup>奈落婆らを討ち留めて、日頃の恨みを返せしかば、御堂の縁に尻打ち掛け  
て、<sup>ひさご</sup>買い持て来たりし瓢の酒を飲み尽くして寒さをしのぎ、<sup>つえ</sup>仕込み杖を引き下げて、道を両三町走  
る程に、<sup>あちこち</sup>彼方此方の百姓どもが<sup>やまそくら</sup>山芋倉の火を消さんとて、雪をおかして走り集うに端無くも行き会  
いければ、桜戸はやがて声を掛け、  
「人々早く<sup>かしこ</sup>彼処に至りて、火を防ぎ止めたまえかし。私は<sup>わらわ</sup>御館<sup>みたち</sup>に赴いて、<sup>おもむ</sup>四伝次主<sup>しでんじぬし</sup>に訴え申さん、  
やよさあさあ」と云い捨てて、やり過<sup>す</sup>ごしてぞ走りける。

さる程に桜戸は雪を明かりに一里か二里か行方も定めず走るになん。真夜中頃になりしかば、身  
はひどく飢え疲れ、寒さも<sup>かた</sup>耐え難かりけるに、と見れば向かいの森の<sup>ほとり</sup>辺に<sup>かま</sup>一構えの<sup>いけがき</sup>生垣あって、  
<sup>かぶきもん</sup>冠木門は閉てあれども、<sup>たて</sup>垣の隙より<sup>すき</sup>点し<sup>とも</sup>火の影ちらちらと見えしかば、<sup>もん</sup>門の<sup>ほとり</sup>辺に立ち寄って、扉を  
押せば開いたり。

内より「誰ぞ」と声を掛けるに、桜戸早く進み寄り、  
「私は<sup>わらわ</sup>今宵、<sup>やまそくら</sup>山芋倉の<sup>さんか</sup>近火に<sup>すみか</sup>住処を走り出て、道に迷って来る者なり。かたの如くの大雪にて、道  
さりあえず難儀に及びぬ。しばし<sup>いろり</sup>囲炉裏に当らせて、濡れたる衣を干させたまえ」と云いつつ、や  
おら戸を開ければ、<sup>こ</sup>此は一棟の長屋にて、内には<sup>いっせなたり</sup>五七人の<sup>しず</sup>賤の女らが糸を繰り、麻を紡いで、夜な  
べをしてぞ至りける。

その時その<sup>しず</sup>賤の女らは桜戸をつらつら見て、  
「そはいと難儀にこそあらめ。此方へ寄って当りたまえ」と云うに桜戸喜んで、「許したまえ」と云  
いながら、にじり上がりつ<sup>いろり</sup>大囲炉裏の<sup>ほとり</sup>辺に近づき、身を温め濡れたる衣を干す程に、酒の香ふんと  
してければ、<sup>あた</sup>火の明かりにて<sup>いろり</sup>辺りを見るに、一升徳利を<sup>いろり</sup>囲炉裏の隅の灰に埋ずめて置きたるなり。

その時、桜戸は賤の女らに打ち向かって、  
「私は身の内冷え凍え、あまつさえ(その上に)飢え疲れたり。願うは少し此の酒を分け与えて飲ま  
せたまえ。酒の<sup>あた</sup>値は<sup>つぐな</sup>償うべし」と云うを皆々聞きながら、

「此は我々が飲むにだもなお多からず、<sup>わによろ</sup>足し無き物をいかにして、和女郎に飲ません。モウ良い加  
減に出て行きね、<sup>えよう</sup>栄耀(贅沢)にほちゃけて<sup>ものねだ</sup>物強請りせば、男衆を呼び寄せて、えら酷い目に会わせ  
るや」と云いつつ、どっと打ち笑えば桜戸は胸に据えかねて、

「此は奇怪なる<sup>かごん</sup>過言かな。否と云われる此の酒を押し飲まんと云うにはあらぬに、<sup>ひど</sup>いら酷い目に  
合わせんとは今一言云うて見よ。さあ云わずや」と息巻いて、<sup>いろり</sup>囲炉裏をはたと打ち叩けば<sup>やにわ</sup>矢庭に<sup>ちやがま</sup>茶釜  
を打ち倒し、はっと立ったる▼灰諸共に火もまた四方に散乱し、<sup>あた</sup>辺りに<sup>つど</sup>集いし女どもは目口に灰の  
入るもあり、<sup>こびん</sup>小鬢を<sup>もすそ</sup>焼かれ<sup>こが</sup>裳裾を焦して、<sup>やけど</sup>したたか火傷をするもあり。等しく「あっ」と叫びつつ、  
驚き恐れて、皆諸共に表の方へ逃げ失せたり。

※小鬢(こびん)：頭の左右側面の髪

桜戸これを見送って、からからと打ち笑い、その徳利を引き出して茶椀に注いで飲む程に、思わずも一徳利の酒を残り無く飲み尽くして、仕込み杖<sup>つえ</sup>を突き立てつつ、身を起しつつ立ち出て、不知案内の雪道をそことも分かず行く程に、飢えて飲みたる酒ならば幾程もなく酔いは昇<sup>え</sup>って、足元しどろに定らず。一步は高く一步は低く、只よろよろとよろめくままに、たちまち躓<sup>つまづ</sup>き倒れけり。

およそひどく酔<sup>え</sup>いたる者が伏し転<sup>まろ</sup>んでは遂に得起きず。桜戸は降り積もる雪に半身掘り埋<sup>め</sup>ずめても寒さも知らぬ高いびき。日頃にも似ず哀れなり。

さる程に賤<sup>しず</sup>の女らは慌<sup>め</sup>て惑<sup>おもむき</sup>いつつ逃げ出て、桜戸の事の趣<sup>かよう</sup>を斯様斯様とかしましく男共に告げしかば、皆々これを聞きながら、

「さては盗人御座<sup>ぬすびとござ</sup>んなれ。遠くは行かじ追っかけよ」とて、麻繩、棍棒、松明<sup>こんぼうたいまつ</sup>を手に手にひ下げて走り出れば、小鬢<sup>こびん</sup>を焼かれし女子<sup>おなご</sup>らも遅れじとてぞ追う程に、行くこと今だ四五町<sup>す</sup>に過ぎず、と見れば、降り積もりし雪の中に酔<sup>え</sup>い伏したる女あり。

小鬢を焼かれし賤<sup>しず</sup>の女は先に進んで松明<sup>たいまつ</sup>を振り照らしつつ、と(兎)見かう(角)見て、「盗人女はこれなり」と云うに皆々折り重なって、袋の物を取る如く、衿髪<sup>えりかみつか</sup>挿んで引き起こし、早ひしひしと縛<sup>いまし</sup>めて、もと長屋へ引きもて帰って、厳しく柱<sup>つな</sup>へ繋ぎ留め、「明日の朝、御前様<sup>ごぜんさま</sup>のお目覚めあれば、訴え申さん。それまで誰彼守れ」とて、皆、夜の明けるを待ち居りける。

かかりし程に桜戸はようやく酒の酔<sup>え</sup>い覚めて、驚き呆れて声を振り立て、「此は何故に理不尽<sup>こなにゆえりふじん</sup>に、かくは我儕<sup>わなみ</sup>を縛<sup>いまし</sup>めたる。この縄早く解かずや」と云わせも果てず、女子共<sup>おなご</sup>はからからと打ち笑い、

「盗人女の猛々<sup>ぬすびとたけだけ</sup>しさよ。おのれは酒を盗み食らい、あまつさえ火傷をさせ、小鬢<sup>こびん</sup>も布子<sup>ぬのこ</sup>も焦がさせしを早忘れしか。不敵<sup>くせもの</sup>の曲者<sup>のし</sup>。なお、辛き目を見せんず」と罵<sup>ののし</sup>る他は無かりけり。

かくて、その夜も明けしかば御前様<sup>ごぜんさま</sup>のお目覚めぞと知らせによって、その男女は桜戸を引き立てて、母屋(本屋)へ参<sup>えんがわ</sup>って縁側<sup>ほとり</sup>の辺に皆々居並び、

「昨夜、囚<sup>ゆうべ</sup>らず盗人女をからめ捕<sup>ぬすびと</sup>って候なり。いかが計らい申さんや」と言葉等しく聞こえ上げれば、しばらくして主<sup>あるじ</sup>の婦人は奥の間より立ち出て、

「そはいかなる盗人ぞ」と問いつつ近く立ち寄って、桜戸を見て大きに驚き、「そは虎尾の刀自ならずや。いかなる故<sup>ゆえ</sup>にここへ来て、百姓どもにおめおめと絡<sup>から</sup>め捕られたまいたる。思い掛けなや浅ましや」と云われて驚く桜戸も眼<sup>まなこ</sup>を定めて見上げるに、この婦人は別人ならず、これ折瀧<sup>おりたき</sup>の節柴<sup>ふししば</sup>なり。

「此は此はいかに」とばかりに、ただ喜び、ただ恥じたる桜戸は声を振り立て、「私<sup>わらわ</sup>いかでか盗みをすべき。只、一徳利の酒ゆえに、酔<sup>え</sup>い伏したる間に絡<sup>から</sup>められたり。私<sup>わらわ</sup>が上には様々なる物語がはべれども、一朝<sup>いちちよう</sup>には説き尽くし難<sup>がた</sup>かり。願<sup>ねが</sup>うは私<sup>わらわ</sup>を救いたまえ」と叫ぶになん。節柴<sup>ふししば</sup>は「さこそ」と頷<sup>うなず</sup>いて、忙<sup>いそ</sup>しく桜戸の縛<sup>いまし</sup>めの縄を解き捨てて、その男女を叱<sup>なんによ</sup>り退<sup>しか</sup>け、まず腰元<sup>こしもと</sup>らに云い付けて、衣一重<sup>きぬ</sup>を取り出させ、桜戸の濡れた衣を上より下まで着替<sup>か</sup>えさせ、奥座敷<sup>おくざしき</sup>へ伴<sup>とも</sup>いつつ、酒をすすめ、朝飯<sup>あさいい</sup>をすすめて、他事<sup>たじ</sup>無くもてなせば、桜戸はその身の災<sup>わざわ</sup>い、富安<sup>とみやす</sup>舳太夫<sup>うすたふ</sup>、陸船<sup>くがふね</sup>らの事、又、剣山<sup>つるぎさん</sup>四伝次<sup>しでんじ</sup>、奈落<sup>ならくば</sup>婆<sup>ば</sup>の事の趣<sup>おもむき</sup>、囚<sup>ゆう</sup>らず恨<sup>うら</sup>みを返したる始め終りを囁<sup>ささ</sup>き

示せば、<sup>ふししば</sup>節柴<sup>かんるい</sup>聞いて感涙<sup>ぬぐ</sup>を押し拭<sup>あた</sup>いつつ、辺<sup>あらわ</sup>りを見返<sup>あらわ</sup>り、

「重ねし不仕合せもな頼もしき御身の命運。今、計らずして私の方へ、来たまいぬるこそ嬉しけれ。ここは私の別荘にて、昨夜粗忽に思い違えて御身を縛め引きもて来る彼の男女共は屋敷守の百姓なれば、必ず心を置きたまうな。私は昨日、ここへ来て、思わず雪に降り込められて、母屋へ帰らでありしかば、これも只、御身の為に大方ならぬ幸いなり。さはれこの所は浅まにて人目を忍ぶによろしからず、母屋へ伴いはべらん」とて、その夕暮れに桜戸を乗物に打ち乗せて、折瀧の庄へ帰りつつ、内外の者に心得さして、世に頼もしく桜戸を深く匿<sup>かくま</sup>いたりければ、桜戸は恩を感じて、真琴屋真介夫婦の者が真心さえに告げ知らせれば、節柴聞いて桜戸がとにつけても、かくにつけても人の助けのあることを称えてしきりに感じける。

されば又、その夜さり(夜分)、<sup>くがふね</sup>陸船、<sup>へたいふ</sup>舳太夫、<sup>ならく</sup>奈落らは皆、桜戸に討たれしが、<sup>しでんじ</sup>四伝次は浅手にて未だ死なで在りしにより、彼偽<sup>いつわ</sup>って領主に訴え、

「桜戸は悪心止まずして、山芋倉を焼き失い、あまつさえ舳太夫、<sup>へたいふ</sup>陸船、<sup>くがふね</sup>奈落らを斬り殺して逐電したり」と申すにぞ、佐渡の領主本間の太郎は由を聞いて驚き怒り、俄かに組子らを手分けして、八方へ差し向けつつ、村里毎に下知を伝えて、

「罪人桜戸を絡め捕って、引きもて参る者あれば、三十貫の褒美錢を賜うべし」とぞ▼触れたりける。

既にして、これらの由を桜戸はほのかに伝え聞いて、<sup>ふししば</sup>節柴に囁く様、

「斯様斯様の風聞あり。かかれば御身が今更に私を匿<sup>かくま</sup>いたまわぬにあらず。私今更ここに居難し。只、速やかに他郷へ走って、災いを避けんとするに、身の暇をたまえかし」と云うを節柴打ち聞いて、

「しからは、私が手引きして、御身をやるべき所あり。そもそも近江の国の伊香郡賤の砦に三人の女武者あり。第一の大將は大歳麻巨綸と呼ばれ、第二の大將は女仁王杵木と呼ばれ、第三の大將をあまつかりまゆみと云えり。彼女らは先に滅びたる柴田の残党の梶原弥三郎の余類にて、女に似気無き武芸あり。先にその三人の勇婦らが流浪して諸国を経回り※、或る年、この地に来たりしかば、私が屋敷に留め置いて、養うこと一年余り。又、立ち去らんとせし時に、路用を多く取らせたり。

※経回る(ひめぐる):あちこちをめぐり歩く。遍歴する。

かかれば、私が手紙をもて、御身を頼み遣わせば、留めんこと疑い無し。さればその巨綸らは四百五十人の手下を集めて、賤ヶ岳に砦を構え、余呉と琵琶の湖を前と後ろの要害(城塞)に、余呉川、飯浦の大川を境として、をさをさ猛威を振るうと聞けり。御身が彼処に身を寄せたまえば、生涯後る安かるかるべし。さりながら、当国の港々には新たに関を据えられて、人の出入を檢めると伝え聞いたる事あれば、首途(旅立ち)に難義あり。いかにせまし」と頭を傾け、しばし案じて頷ぎつつ、

「良き手立てのはべるなり。謀り事は斯様斯様」と膝すり寄せて囁き示せば、桜戸は斜めならず喜んで、やがてその儀に任せけり。

※要害(ようがい):①険しい地形で、敵の攻撃を防ぐのに便利なこと。土地。②城塞。城郭。とりで。③防御をかためること。

かくてその次の日に節柴は浦遊びに出づると偽って、腰元を数多召し連れたるその中に桜戸を  
腰元と共にいで立たして、小木の港に赴く程に、ここにも関を据えられて、本間の家の子(家臣)、沢  
足江番太が組子を大勢従えて、この所を守りしが、兼ねてより相知ったる折瀧の節柴が浦遊びに行  
くと聞いて、忙わしく出迎えて、

「珍らしや折瀧殿。この頃のいと寒きに、何処へ赴きたまうぞ」と問われて、節柴は微笑んで、  
「私は鬱気の病があるに、閉じこもりて居らんより、浦辺に出て貝を拾えば、少しは保養になら  
んかとして、時ならぬ浦遊びも日和の良きにいでたるなり。御身は又、何故にここに勤役したまう  
やらん」と云うに江番太は

「さればとに都の流人の桜戸と呼ばれし者が倉を焼き、人を殺して去ぬる日に逐電したるにより、  
領主の仰せを承り、人の出入りを検める臨時の役に候」と云うに節柴頷いて、

「そは御大義にこそはべれ。私が具したる供の内に彼の桜戸も在るべきに。いざ検めて見たまわず  
や」と云いつつ笑えば、江番太もからからと打ち笑い、

「実に、御供の女中の群れには彼の桜戸も在るべけれど、節柴殿の事なれば検めるには及ばぬ事な  
り。さあさあ通りたまえかし」とうち戯れて、下部らに下知して木戸を開かせれば、節柴は仕済  
ましたりと▼心密かに喜んで、皆諸共に港へ赴き、さて桜戸には忍びやかに旅装いを整えさせて、  
兼ねて用意の船に乗せ、越後の方へ落とし遣わし、節柴は去らぬ体にて、終日貝を拾いつつ、帰る  
さに江番太に物を贈って喜びを述べ、暮れて宿所へ帰りけり。

○さる程に桜戸は節柴の情けにて、難なく港を逃れいで、越後の国へ押し渡り、なお越前を経て、近江  
の賤が砦に赴く程に、日に歩み夜に宿り、急がぬ旅に日数経て、暮れ行く年に近江の菅野浦にぞ着  
きにける。

折から昨日の雪晴れて、山白妙に風寒く、この辺りには只一軒の腰掛酒屋ありければ、桜戸は進  
み入り、床几に尻を打ち掛ければ、酒屋の杜氏が出迎えて、

「いかに酒をや参らすべき、強飯も候」と云うに桜戸は頷いて、

「否、強飯は欲しからず。今日の寒さの耐え難きに、さあさあ酒を飲ませよ」と云うに杜氏は心得  
て、酒二三合を温めつつ、一椀の湯豆腐に鮎の煮浸し取り揃え、早置き並べて勧めけり。

その時、桜戸は杜氏に向かって、

「私は急ぐ用あって、賤が砦へ行く者なり。渡し舟のあるべきに、雇うてたべ」と頼むにぞ、杜  
氏は聞いて眉をひそめ、

「ここは船着きならざれば、渡し舟も候わず」と云うを桜戸押し返し、

「渡し舟はあらずとも雇えば舟を貸す者あらん。船賃は望みに任せん。ともかくもして雇うてた  
べ」と再び頼めば、頭を振りつつ、

「稀には舟が無きにはあらねど、此の頃の大雪にて舟稼ぎする者は絶えてここに一人も無し。も  
ちろん飯浦、浜村の山間は陸続きにて候えども近頃切所(難所)※を切り塞がれて、鳥も通わずなり  
たれば、船ならずしてなかなか赴かんこと叶い難し」と云われて桜戸は詮方も無く、ほとほと困  
り果てたる折から、一人の女がとの方より、しづしづと進み入り、桜戸に打ち向かい、

「御身は今、賤の砦へ赴きたしと云われしならずや。彼処に知る人候か。或るいは人の手引きに

よって、初めて赴きたまうにや。御身は何と云う人ぞ」と問われて、桜戸隠すに由なく、  
「私は桜戸と呼ばれる者にて、この度、折瀧の節柴殿の勧めによって、遙々佐渡より来るなり」と  
云うに驚くその女は辺に寄って尻打ち掛けて、  
「さては世の風聞に隠れなかりし、御身は女武者所の教え頭と聞こえたる彼の虎尾の桜戸殿か」と  
再び問われて、にっこり打ち笑み  
「云われる如く、虎尾の桜戸は私にこそ」と告げるに、「さては」と喜んで、  
「しからば、ここは端近にて心の内を述べ難し。まず此方へ」と忠実やかに奥の座敷へ誘って、又、  
更に肴を添え、酒をすすめて、さて云う様、  
「我儕の事は賤の砦の巨綸の手下の大將にて、暴磯神の朱西と呼ばれる者なり。さりし頃より此の  
所にこの酒店を出しつつ、世の風聞を聞きさだめ、此方に憩う旅人の味方にすべき者あれば、説き  
すすめて砦へ遣わし、▼又、身の仇となるべき者は密かに痺れ薬にて殺して、憂いを除くなり。  
これにより御身をも鎌倉方の者ならば痺れ薬を酒に加えて押し片付けんと思ひしに、三大将が大恩  
受けたる折瀧殿の引き付けなる虎尾殿でありけるを知らずば事を誤つべし。真に危うき事なりき。  
我儕が同道すべけれども、既に早黄昏なり。今宵はここに泊りたまえ。明日はつとめて伴うべし」  
と云い慰めて、もてなせば、桜戸深く喜んで、彼の亀菊の邪まにて、無実の罪に落とされたる其の  
事の始めより、舩太夫、陸船を討ち取って恨みを返せし事の趣の一部始終を物語れば、朱西は耳  
を傾けて膝の進むを知らざりけり。

※切所（せっしょ）：峠などの難所。また、要害の場所。

かくてその明け方に朱西は桜戸を呼び起し仕度を整え、半弓（6尺3寸の弓）手挟み立ち出て、水際に  
茂き枯れ葦へ鎗矢射込むを合図にて、たちまち葦の茂みより早船一艘漕ぎ出して、此方の岸へ着け  
しかば、朱西は桜戸と諸共にその舟に打ち乗って、山梨の磯へ押し渡り、ここより陸に打ち登り、  
船をば返し使わしつつ、程なく砦に赴いて、桜戸の事の由を巨綸らに告げしかば、巨綸聞いて二  
人の勇婦の杣木、真弓ら諸共に書院に出て、桜戸を呼び入れさせて対面す。

その時、巨綸は桜戸に打ち向かって、  
「御身の上は暴磯神の物語にてつぶさに聞きぬ。折瀧殿は恙無きや」と問えば、桜戸「さん候」、書状  
を差し越したまいたり。

「これ御覧ぜよ」と懐より一報を取り出して、巨綸に渡すにぞ。巨綸やがて開き見て、手下の者  
に云い付けて、酒肴を持っていださせ、まず桜戸をもてなしつつ、腹の内に思う様、

「・・・桜戸はその始め女武者の頭にて十八番の武芸に長たり。しかるに我は青表紙の唐文字を  
よく読むのみ。武芸においては二の町（二流）なり。又、杣木、真弓、朱西らも十二分の武芸ならぬ  
に、▼桜戸を留めて我らの群れに入れれば、遂に山を奪われるべし。益にてあれ。」と思案をしつつ、  
金二十両取り出して、桜戸に贈って云う様、

「折瀧殿の引き付けにて遙々と来たまえども、いかにせん此の砦は分内（領分）※狭く兵糧も多から  
ねば、長く御身を留め難し。此はいささかの品ながら路用として参らせる。何処へなりとも赴いて、  
良き人を頼みたまえ」と云うに桜戸は押し返して

「私は路用の乏しき故に遙々ここへ来るにあらず。節柴殿の勧めにより、長く此の所にて身を寄せ  
んとのみ思ひしに、この賜物は本意にあらず。まげて仲間に入れさせたまえ」と云うに杣木も朱西、

真弓も巨綸を諫めて云う様、

「兵糧豊かならずと云えども、今この女中を留めずば、引き付けられし節柴殿に受けたる恩を忘れるに似たり。よくよく思案したまえ」と云うに巨綸は頭を打ち振り、

「節柴殿に対してはいささか不実に似たれども、未だこの桜戸の心の底を知るに由無し。只一封の状を持って、心も得知らぬ人を留めて、身の災いとなる事あれば後悔そこに絶ち難し。此は気の毒なる事ながら、只、その金を受け収めて、何処へなりとも赴きたまえ。我らが心に如才は無けれど、御身を養う余力は無し。明日は努めて打ち発ちたまえ」と苦々しげに答えつつ、留める気色は無かりけり。

桜戸が賊の砦を離れて、投名状を求めるところ、これらの訳はつぶさにこの次の巻に見えたり。

傾城水滸伝 第三編ノ二 曲亭馬琴著 歌川国安画

その時、桜戸は膝を進めて、

「巨綸の刀自、何故にさのみ疑いたまうぞ。私は先に亀菊の謀り事に落とされて、無実の罪を得てしより、災い再びこの身に迫って、進退既に極まったり。さればこの所に身を寄せんと願う事の他は無きものを」と云えば、又、杣木らも言葉を添えて諫めるにぞ、巨綸しばし打ち案じ、

「しからんには義としたる投名状を我らに見せて、赤き心を表したまえ」と云うを桜戸聞きながら、「そは易かるべき事にこそ。硯と筆を貸したまえ。望みのままに書きはべらん」と云えば朱西方辺より、

「否、投名状という由は物書く事にはあらずかし。およそ初めて此の砦に来る者は越前街道に立ち出て、一人の旅人を討って取り、その首を携え来て、二心無きを示すを投名状と名付けたり」と諭すに桜戸頷いて、

「それも又、易かるべし。心得はべり」と請け引くにぞ、巨綸重ねて

「しからんには明日より三日に限って、投名状を持参したまえ。三日の内にその儀無くば、決してここに留め難し。縁無きものと諦めて、何処へなりとも行きたまえ」とその期を押せば、桜戸は「仰せにや及ぶべき」と答えて、その日を過ぐしけり。

かくて、その明けの朝、桜戸は早く起き、一人の小者を案内としつつ、短刀を腰に横たえ、仕込み杖を突き立てて、飯浦の山間の浜村の方に立ちいでて、旅人遅しと待ちけれども、頃しも年の終わりにて降り積もりたる雪深く、山々は只白金をもて伸べたる如く冴え渡り、寒さ耐えがたかりければ、はや夕暮れになるまで人が一人も通らねば、桜戸は望みを失って、空しく砦に立ち帰れば、巨綸「さこそ」とあざ笑い、

「いかに投名状を持って来ざるや。明日も明後日もおなしく帰れば、ここには決して留め難し。ずいぶん精を出されよ」といって憎々しげにぞ懲らしける。

かくて又、桜戸は次の日も小者を従え、昨日の山路に赴きつつ、終日そこに立ち暮らせども、こ

の日も人に会わざりければ、いよいよ望みを失って、

「いかなれば、かくまでに我身は運の拙き(良くない)や。とてもかくても止められぬ、宿世ならん」と打ち嘆くを供の小者が慰めて、

「されども、明日又、一日あり。心を痛めたまうな」と、諫めて砦へ帰り来れば、巨綸ますますあざ笑い、

「明日も又、獲物無くば、再び此方へ帰るに及ばず。何処へなりとも行きたまえ」と云うに、桜戸答えも得せず、その夜は早く臥所に入って、又、次の日の暁より砦を出て行く程に、彼の案内する小者が「今日はいささか所を替えん」と云うに、その儀に任せつつ、羽振山の麓に立て行き、東の人を待ちけれども、未の下刻になるまでに、この日も人に会わざりければ、桜戸は遂に思い絶えて、

「かくては砦へ帰り難し。日の暮れぬ間に里へ行き、今宵の宿りを求めん」とて、木陰をいづる折しもあれ、と見れば一人の旅人が野坂の方より来にければ、「天の与え」と喜ぶ桜戸、腰刀を打ち振って、進むを見返るその旅人は「あっ」とばかりに驚き恐れて、荷物を捨てて一散に逃げて行方は知らざりけり。

桜戸は偶さか(偶然)※に来る旅人を追い無くし、しきりに後悔したりしを供の小者が慰めて、「投名状は得たまえねども、此の度、荷物も時に獲っては一つの功になるべきなり。それがし砦へ持来して、事の由を告げ申さん」と云いつつ、その荷を引き担ぎ、砦を指してぞ急ぎける。

※偶さか(たまさか): ①偶然。思いがけず。 ②まれに。たまに。

さる程に桜戸はしばらく残り留まって、なお旅人を待つ程に、遙か向かいの麓路より、旅人とおぼしき女が此方を指していで来にけり。およそこの時代の風俗にて、女と云えども旅路は腰に刀を横たえたり。桜戸これを見るより「我物得たり」と喜んで、仕込み杖を引き側め、まっしぐらに突いてかかれれば、その女は大きに怒って、

「盗人女めが飽くこと知らず、我が供人に持たせたる荷物を奪って、刺さえ、私に敵対う不敵さよ。さあさあ荷物を返さずば、目にも物見せん」と氷の刃をひらりと抜いて、面も振らず丁々発止と戦ったる。互いの手練、虚々実々※、一往一來※、鎬を削る雪の山路踏みしだき戦うに、既に早五十余太刀に及べども未だ勝負は無かりけり。

※虚々実実: 互いに計略やわざを出し尽くして戦うこと。 ※一往一來(いちおういちらい): 行ったり来たりすること。

かかる所に巨綸らは先に小者の知らせにより、杣木、真弓ら諸共に数多の手下を従えつつ、砦を出て山を下り、▼早や此の処へ来る程に、彼の体たらくに且つ驚き、しきりに感じて声を振り立て、「御両所、しばらく止まりたまえ。やよなう刃を収めたまえ」と呼び掛け呼び掛け馳せ近づいて、両人を押し隔てさせ、彼の女に打ち向かい、

「驚き入ったる御身の武芸、感ずるになお余りあり。我々は賤の砦の頭領の賽博士巨綸、女仁王杣木、天津雁真弓なり。又、この女中は虎尾の桜戸殿にて、斯様斯様の事により、佐渡の配所を逃れ出て、我らを頼みて来る故に投名状を求めるとて、事のここに及べるのみ。そもそも御身はいかなる人ぞ、名乗りたまえ」と懇ろに問いかけられて、女はにっこと打ち笑み

「私は元大内の采女にて、女武者所の頭なりし、青柳という者なり。我儕※の色は青白ければ、

人あだ名して青嵐の青柳と云えり。しかるに先年、私が預かりし弓場殿の御弓懸を紛失したる咎により、都を追放せられしかば、武蔵の方に赴いて、両三年を過ぐせしに、此の度、御赦免ありしにより、更に都へ立ち帰り、縁を求めて又、元の采女にならん願いあり。そなたに言い分無きならば、速やかに荷物を返して、放ちやりたまえかし」と云うにますます感ずる巨綸は

「さては予ねて伝え聞いたる青柳殿にてありしよの。誤って砦に持て来し荷物はもちろん返すべし。なれどもたまたま名乗り合ひしに、此のままに別れんや。今宵は砦に泊りたまえ。酒一献参らせん」と云うに青柳は否みかね、遂にその意に任せつつ、先に逃げたる供人の立ち帰りしを従えて、いざとてやがて身を起こせば、巨綸は斜めならず喜んで、桜戸諸共に打ち連れだつて、賤の砦へ伴いけり。

かくて巨綸はその夜酒盛りの席※を開いて、青柳をまめやかにもてなしつつ云いけるは「今、都には白拍子の亀菊が院の御寵愛に誇りて、人を損なう事、これ多し。例え帰京したまうともはかばかしき事あるべからず。されば此の砦に留まって、大将となりたまえ。要害最も堅固なれば、誰にはばかる事もなし。まげてこの儀に従いたまえ」と、いとまめやかに留めけり。

※我儕(わなみ):一人称。対等の相手に対して用いる。 ※席(むしろ):すわる場所。また、会合の席

さても巨綸が今、青柳を留めんと思う由は彼女を愛する故にはあらず。此の者は武芸に長けたる者なれば、桜戸を止め置くとも十分彼女の相手になるべし。しからばこの後、桜戸が砦を奪わんと思うとも、青柳にはばかって、その事叶うべからずと、腹の内に思えばなり。

青柳はかくとも知らねど、絶えて留まる気色無く、巨綸に答えて云う様、「御志はいかばかりも喜ばしくはべれども、私の親は由緒正しき北面の武士なりしに、男子が無かりしかば私を武者所へ召されしなり。しかるに罪を被つて、たまたま赦免にあいながら、ここに留まるは不孝なり。悪しく聞きなしたまいそ」と固く否んで従わず。その明けの朝、元の如く供人を具して、砦を立ちいで、都を指して急ぎけり。

是よりして、▼桜戸は賤の砦に留まって、真弓の次の頭となりぬ。又、朱西は元の如く菅の浦に立ち帰り、彼の酒店をぞ守りける。

さる程に青柳は日ならず都に帰り着き、洛中に旅宿を求め、いかにもして元の如く女武者所の采女にならばやとて、所縁に付き、その筋を求め、官人らに賄賂いて、物数多贈りしかば、ようやくに手引きいで来て、願い文をぞ捧げける。

されば亀菊は女武者所の別当なれば、青柳の願い文を開き見て、大いに怒り「彼奴はここに無き落ち度によって、都を追放せられしに、罪許されしは多く得難き身の幸いであるべきに、元の如く武者所の采女になりたしなどと申すは片腹痛き願いなり。とても叶わぬ事なるに、重ねて取次ぎすべからず」とあくまでに罵つて、願い文をずたずたに引き裂き捨ててぞ返しける。青柳は此の由を伝え聞いて、望みを失い、

「いかなれば亀菊は心様の毒悪なる。かくては弥勒の世※に逢うまで、この身の願いは叶うべからず。再び武蔵へ立ち帰らばや」と思うものから、これかれへ物を贈りし事なれば、路用も既に尽き果てたり。只、先祖相伝の三つ具足※と名付けたる短刀一振りありければ、是非無くこれを売り代な



して、路用ろようにせんと思いつつ、或る日その短刀を携さえて、あちこちと歩く程に、三条小橋ほとりの辺ににて、俄にわかに人々どよめいて

「ソレ、牛鬼うしおにが来るぞよ。逃げよ、走れ」と罵ののしり騒げば、青柳は心にいぶかって、ある人に由を問うに、その人答えて、

「近頃、此あたの辺だりに大莫連あばずれ（あばずれ）牛鬼婆うしおにばばと云う溢れ者あぶあり。酒を好んで飽く事なく、ややもすれば人を捕らえて物を強請り、非道ねだを云い掛け、或るいは暴れ、或るいはねじ込み、所の害になる事多し。されども女の事なれば、誰とて相手になる者無く、避けて通せば良き事にして、日毎ひごとにに暴れ歩くなり。今、諸人の立ち騒ぐは彼の牛鬼を恐れるのみ」と告げるに、青柳は興醒めて、立ち去らんとする程に、はや牛鬼が近づき来たるをと見れば、面つらは落蹲らくそん※の面めんの如く、色は赤黒くして陳ひねたる南瓜かぼちゃにも似たり。眼まなこはつぶらにして蝸牛かたつむりを並べたる如く、鼻は横しなに開いて、三つ栗を伏せたる如く、右の袖を押し肌脱いで萎しなびた乳をぶら下げて、左の裾かたはしを片端折さらりして、晒ゆまきし木綿あらわの湯巻あらかを露し、ひどく酔うたりとおぼしくて、足元しどろによるめきよるめき、わざと青柳に突き当たり、矢庭やにわに捕らえ、ちっとも離さず、眼まなこを怒らし、きつと見て、

「此あまの女め、何をかする。いけ邪魔な物を手に持って、つつ立たつたるは何の為ぞ」とよろけかかれど青柳はいささかも騒けしきぐ気色も無く、

「私わらわが持てるは名剣なり。これを売らんとするにより、買うう人を待つのみなり」と云えば牛鬼うしおにあざ笑い、

「その短刀に銘めいやある」と問われて青柳は

「然さればとよ、此こは三つ具足ぐそくまる丸と名付けしなり」と云うに牛鬼うしおには眉をひそめて、

「三つ具足と云うその訳わけいかに」と再び問われて手に取り直し、

「そもそもこの短刀を▼三つ具足という由は第一に鉄をよく切り、その音をせず、第二に髪かみの毛けを刃やいばへ載せて、吹けばたちまち粉ふん々と切れて四方へ散乱す、第三に人を切るに骨を余さず、又、速すみやかにして血潮ちしおを見ず。この三つの奇特きどく（不思議）あるをもて、三つ具足と名付けたり」と云うに牛鬼うしおに頷うなずいて、

「我、その刃を買かうべきに、値あたいかばかりにて売うるものぞ」と問うに青柳ちっとも疑義せず、

「今いま、要よう用の事じあれば、三十金にて手離すべし」と云えば牛鬼うしおに打ち笑い、

「そは甚はなはだ高直こうじき（高価）なり。三百文にて我買かわん。まけよ、まけよ」と急がせども、青柳は騒けしきぐ気色なく、

「そなたは真まことに買かうにはあらじ」と云わせも果てず、牛鬼婆うしおにはまなこを怒らし、

「さばかりの物を買かわざらんや。只今、云うたる三つの奇特きどくを目の当たりに試して見せよ。まず壺番かに鉄てつじや鉄てつじや」と云いつつ、帯あわいの間まを探たって、銭五六文を取り出して、「切きって見せよ」と手に渡せば、青柳はその銭を橋はらの欄干らんかんに押し重ね、刃やいばを抜いてこれを切るに、さながら豆腐とうふを切るに等しく、ちっとも音はせざりけり。

※弥勒みろくの世：弥勒菩薩がこの世にくだって衆生を救うとされる未来の世。釈迦（しゃか）入滅から56億7000万年後。

※落蹲らくそん（らくそん）：舞楽の一つ。二人舞の納蘇利（なそり）を一人で舞うときの称。

※具足ぐそく（ぐそく）：①物事が十分にそなわっていること。②皆具の鎧。また、単に甲冑。

牛鬼婆うしおにはこれを見て、又、忙いそわしく盆ひらの窪くぼの毛を幾筋か抜き取って、

「さあ、その次は髪ふんの毛ふん、髪ふんの毛ふん。吹いて見せよ」と手に渡せば、青柳これを受け取って、刃の上  
に打ち乗せて、ひと吹きふっと吹く程に、毛は粉々と切れ散ったり。

牛鬼うしおに婆は又、これを見て、からからと打ち笑い、

「さてその次は人じゃ人じゃ。さあさあ人を斬って見せよ」と云えば青柳は頭こうべを振って

「太平の世にいかにして故ゆえ無く人を斬られるべき。そなたなお疑ええば、犬を捕らえて引き持て来よ。  
その犬を斬って見すべきぞ」と云わせもあえず、声を振り立て、

「おのれは先に何とか云いし。人を斬るに骨を余さず、速すみやかにして血潮ちしおを見ずと、まさしく云い  
しにいかにぞや。犬を斬るとは聞かざりき」としきりに喚わめき騒さわぐになん。

折ろくにやくなんによから行き来の老若男女は事こそあれと立ち集って、おっ取り巻きつつこれを見るに、なお牛鬼うしおに  
におお恐れて、誰も近くは寄らざりけり。

青柳はかかれども臆おそしたる気色けしきも無く、牛鬼うしおにに打ち向かって、

「そなた、真まことに買わんとならば、由なき事を云わずもあれ。実に切るべき人は無し」と云えば、牛  
鬼うしおに又、喚わめいて

「人が無くば、我を斬れ。我その刃ほりを欲するなり」と云うに青柳は微笑んで、

「そなた、いよいよ買うならば、さあさあ金を持って来たまえ」と云うをば聞かず、声を振り立て、  
「我はちっとも金は無し。只今掛かけに売られずば、さあ我を斬れ、斬らずや」と小突き廻まわり争まじう弾  
みに、彼の短刀に手を掛けて、奪い取らんとしてければ、青柳、今は堪忍かんにんの二字も甲斐に無じき怒りに  
任まかして、短刀ひらりと振り上げて、水もたまらず牛鬼うしおにの細首ほそくび、丁ちやうと打ち落おとせば、軀むくろもだうと倒  
れけり。

その時、青柳は声高やかに、

「なう、見物の人々よ。見たまう如き仕合せにて、女にに似に気無げき事ながら、止とむ事を得ず彼女を斬  
りたり。願ねがうは人々私わらわの為ために証人おおやけになり、公おおやけへ共に訴もろびとえたまえかし」と云うに諸人皆立ち寄って、  
青柳を誉め慰めて、

「此うしおにの牛鬼おおかたは大方ならぬ所の害になる者なりしに、討うち果たされしは幸さいいなり。我々、諸共訴え申  
して、事の証人たるべし」とて、皆、青柳を先に立て、六波羅ろくはらの検断所けんたんじょへ参りつつ、事しかじかと  
▼訴えければ、六波羅ろくはらの総そう司つかさ伊賀いはの判官はんくわん光季みつせは此の訴えを聞き定め、両三人の組子くみこをもって、青柳  
と共に三条小橋へ使わして、牛鬼うしおに婆しがいの死骸あらたを検しらべ、その後のちに青柳しほを暫しばらく牢屋ひとやに留め置いて、なお  
これかれと問たひ質たすに、牛鬼うしおに婆しがいは此の年頃、人の害となりし者にて、宿所しゆくしょも無く子もあらず、その  
凶悪も少なからねば、光季すなわち青柳の人殺しの罪をなだめて、筑前ちくぜんの国太宰府ださいふへ流し使わす由  
を云い渡し、ちん五ちん六と云う二人の下使かいを差さし添つえて、青柳を打ち守らせ、遂つに彼の地へ遣つかわ  
しけり。

これにより三つ具足丸の短刀おおやけは公おおやけへ召めし上げられて、長みくらく御蔵みくらに置かれける。されば青柳の証  
人に立ちたる里人らは此の度彼の女の働きにて所の憂うれいを除きして、且かつつ喜よろこび且かつつ憐あはれみ、銭ぜにを  
集あめて路用ろようを贈り、涙を流して別れけり。

かくて青柳は再び罪人ざいにんとなりしより、首枷くびかせを掛けられて、ちん五ちん六ちんごちんろくに送られつつ、遠く筑紫つくし  
へ流される。さて、幾ばくの日数を経て、その船太宰府ださいふに着つきにければ、すなわちちん五、ちん六は

青柳を打ち守り、宰府の城に赴いて、六波羅よりの送り状を探題信種に参らせて、事の由を述べしかば、信種やがて家の子(家臣)らに青柳を受け取らせて、答え文を渡しにければ、その次の日に、ちん五らは都を指してぞ帰りける。

そもそもこの時、筑紫の探題小武信種と聞こえしは北条義時の娘婿にして、内室十時御前は義時の愛女なり。されば筑紫は都に次いで西国第一番の大港、繁盛類無きのみならず、探題は六波羅の総司にもをさをさ劣らず、西九ヶ国を管領して、勢いありける大任なるに、しかも信種は今飛ぶ鳥も落ちると云う鎌倉の執権の義時の内縁なれば、その家いたく富み栄えて、家の子(家臣)の多かるに、文武の道に長けたる者もその内に少なからず。

しかるに信種の奥方十時御前は女に稀なる武芸を好んで、召し使う女房に武芸を習わしたまいしかば、その筋にもまた武術を良くする者も数多あり。これにより都の沙汰に習わんとて、ここにも女武者所を置かれしに、未だその教え頭と致すべき相応の者が無かりしかば、なお物足らぬ心地して、折々夫の信種に打ち語らいたまう程に、▼此の度六波羅より送られたる都の流人の青柳は元大内の采女にて、武芸に秀でし者なる由、申す者のありしかば、十時御前はこの事を又、しかじかと告げたまうに、信種聞いて頷きつつ、

「実に、その青柳は物の用にも立つべき者なり。暫く端者※にして立ち振る舞いを見られんに、何か苦しかるべき」とて、まず青柳の首枷を解き許し、水仕女(炊事婦)※にて使われしに、心利きたる女にて男に勝る事多かれば、目通りをさえ差し許し、辺近くはべらせしが、ある日、十時御前は青柳を招き寄せて、

「そちは武芸に優れし由、人の噂に伝え聞きぬ。されば今より取り立てて、女武者の教え頭に成さばやと思えども、人の嫉みは事の妨げなるべしと、思い返して黙止たり。この宰府の女武者に野森などと呼ばれる者は二三と下がらぬ武芸あり。されば野森と試合をさせて、そちが十分勝ちたれば、その時にこそ取り立てて、教え頭にしたらんには諸人すべて帰服※せん。いかにそなたは彼の野森と立ち会う心はあらずや」と忍びやかに云われるを青柳聞いて一議に及ばず、

「それは此上無き御恩なり。私は始め都にて女武者所に召されたる教え頭ではべりしに、弓場殿の御弓懸を紛失の落ち度により、先には都を追われしなり。さればこそ十八番の武芸の数々、大方ならず諳んじたり。相手は嫌いはべること無し。誰にても試合の事を仰せ付けられしとされば、世にあり難き事にこそ」と、はばかり気色も無く申ししかば、十時御前は喜んで、青柳が申せしままに、又、探題に告げたまえば、信種聞いて頷きつつ、

「さらば、野森と青柳の試合の勝負を見るべし」とて、武芸係の郎党立波兵衛、女武者所の老女字の野江らにしかじかと心得させて、はや明日と定められけり。

※端者(はもの): とるに足らぬ者。身分の低い者。 ※水仕女(みづしめ): 台所仕事をする下女。

※帰服(きふく): つき従うこと。支配下に入ること。帰順。

これにより七十五間の大馬場を試合の場所と相定め、東の馬見所を信種の棧敷とし、西の馬見所を十時御前の棧敷として、紫の幕を張り、紅の毛氈を掛け渡し、東西の棧敷には武芸に長けたる諸侍、女武者らも集めて、所狭きまで居ながれたり。

さる程に警護の足軽百人ばかりが整々として控えつつ、合図の太鼓を打ち鳴らせば、東の方より女武者野森、西の方より青柳がはや静々と立いでたり。

手鉾※の試合であるべしと予め定められしかば、野森、青柳諸共に肌には小鎖の着込みを着て、小手脛当てに身を固め、上には各々黒き衣を着て、玉襷を背高に結び上げ、九尺の槍を引き下げたるが、槍の穂先を抜き取って、麻の布に石灰を包み、丸く鞠の如くにしたるを蛭巻※の上に付けたり。

※手鉾（てぼこ）：薙刀に似た武器。柄に麻糸を巻き、鉄の口金と木の石突きをつけたもの。

※蛭巻（ひるまき）：補強や装飾用に刀・槍の柄や鞘を鉄や鍍金の延べ板で巻いたもの。

これらの事は予（かね）てより信種の指図にて、真の槍をもってせば、命を落とす事もあるべし。互いに黒い衣を着せ、穂先に石灰を包みたる槍を持って立ち合わせれば、突かれる数の多き者はその石灰が衣に付いて黒きも白くなりぬべし。しからば勝負も自ずから分明に知られんとて、かくは仕度をせられけり。

既にして、野森、青柳は又、打ち出す太鼓の音と共に各々立ち上がり、手に手に槍を引きそばめ、まず隆々と素突きして、やっと掛けたる声を合図に野森は槍をひらめかし、青柳の眉間をのぞんで突き倒さんとする所を青柳すかさず受け流す、手練の早業、踏み込み、踏み込み、秘術を尽くす互いの身構え、ここを晴れとぞ闘いける。

かかりし程に激しき穂先を争いかねたる野森は既に負け色見えて後退りするのみなれば、立波兵衛は下知を伝えて、引き太鼓を打たすにぞ、警護の足軽押し隔て、はや東西に引き分けたり。

その時、人々これを見るに、野森の上衣は真白になって、幾十ヶ所か突かれけん。その数も限り知られず、青柳は袖の下に二ヶ所石灰が着いたるのみにて、事既に十二分の勝ちなりけりと、人皆罵り、信種夫婦はことさらに喜び面に表れたり。

その時、兵衛、宇野江らは主君夫婦に申す様、「野森は弓をよくすれども槍はもとより得手にあらず。此の度は馬上にて、弓矢の試合を御覧ぜよ」とて兩人等しく申すにぞ、信種夫婦は止む事を得ず、青柳を呼び寄せて、

「いかに汝は今一度、野森と弓矢の試合をせんや」と問われて、青柳一議に及ばず、「いかでか何を背くべき。ともかくも」と答え申せば、信種夫婦は喜んで、更に衣服を着替えさせ、最上の弓と矢に馬二足を引き出させて、野森、青柳に貸したまいけり。

その時、兵衛が申す様、「弓矢の試合は互いに危うし。各々盾を相持たせ、矢を防がせ候わん。」さはとて、やがて兩人に事の心を得させつつ、小盾二枚を渡しにければ、各々これを肘につないで、その馬に打ち乗りつつ、又、打ち出す太鼓と共に東西より馳せ寄せて、青柳は野森に打ち向かい、「御身まず、私を射たまえ。三度にして当たらずば、私又、御身を射ん。いざ、さあさあ」と急がせば、野森は密かに喜んで、槍の試合に負けたれども、此の度、弓矢の試合に至って、私に先を譲る事、これ得難きの幸いなり。▼射殺してくれんずと思えばにこと打ち笑みて、

「そは心得てはべるなり。さらば、私が射掛ける矢を受け止めたまえ」と答えつつ、又、東西に引き別れて、乗り巡らし巡らし、野森は弓に矢引き番い、矢頃を張りもて切って放せば、青柳早く身を沈ませて、鞍隠れをしてければ、矢はいたずらに行き抜けて、安土（盛り土）※の方に落ちにけり。

野森は既に第一の矢を射損じて、心苛立ち、再び弓に矢番いて、乗り巡らし、追い巡らし、狙いすまして丁と射る。青柳は後ろの方に弦音がしてければ、身を反らしつつ、小盾を持って、すかさず丁と受け止めるに、その矢は発止と折れ飛んだり。野森は二度も射損じて、残るは一矢になりければ、心いよいよせき上して、又、乗り回し隙を窺い、弓に矢番い、矢頃を計る虚々実々、よつ引きひゃうと放つ矢を青柳は右手に受け留め、かい掴んでぞ捨てたりける。

※安土（あづち）：弓場で弓をかけるために作った盛り土。

さて約束の事なれば、此の度は又、野森を青柳が射るべしとて、再び馬を走らせけり。その時青柳思う様、

「……今、野森を只一矢に射殺さんは易けれども、絶えて恨みも無き者をいかでか慘く殺されるべき。只、掠り手を負わせしのみにて、我が弓勢を知らせん」とて、追い回し追い回し、弓を満月の如く引き絞り、矢声を掛けて切って放せば、野森は右の肘を射ぬかれて、馬よりだうと落ちければ、諸人どつとどよめいて、「ああ、射たり、射たり」と褒める声、しばしは鳴りも止まざりけり。

信種夫婦は喜んで、又、青柳を呼び近づけ、女武者の教え頭に取り立てんとせられる折から、又一人の女武者がたちまちそこに進み出て、

「殿様、奥様、待たせたまえ。野森は私の教え子なれども近頃、瘧（熱病）※を患いし、病み上がりの事にはべれば、青柳の相手に足らず、願うは私と青柳で真剣の試合をさせたまえ。私も彼女に負けはべらば、感心して弟子とならん。さ無くばよしや仰せでも得こそは従い奉らじ」と声振り立てて叫びけり。

人々驚いてこれを見るに、此は第一の女武者の索城と呼ばれる者なり。いと短気なる女なれば、人あだ名して向不看の索城と呼びなしたり。

※瘧（おこり）：発熱、悪寒やふるえのおこる病気。マラリア性の熱病。おこりやみ。

信種夫婦は青柳を取り立てん為のみから試合を催されしに、諸人とにかく従わず、今また索城が押して試合を望む事、心に危ぶみ思えども流石に否とも云いかねて、又、青柳にしかじかと云い含め、心得させて、名馬一疋を引きいさせて、あれに乗れとて貸したまえば、十時御前も業物の薙刀一振りを取り寄せて、青柳にぞたまわりける。

されば又、立波兵衛も秘蔵の名馬一疋を索城に貸し与え、主君夫婦に申す様、

「索城、青柳の立会いに▼真剣をもてせられん事、いずれ一人は手を負うか、さらずば命を落とすべし。この儀を止めさせたまえかし」と云うを信種は聞きながら、

「よしや命を落とすとも彼女らが望みに任せざらんも、武士には似気無き業なるべし。さあさあ」と急がしたまえば、兵衛は是非なく下知を伝えて、知らせの太鼓を打たせけり。

さる程に索城は腹巻に小手脛当てして、腰に一振りの太刀を横たえ、立波栗毛と呼ばれたる駿馬にゆらりと打ち乗って、手にはいと大きなる鉞を引き下げて、東の方より乗りいませば、青柳も同じ装束にて、駿馬に打ち跨り、十時御前がたまわりし薙刀を脇挟み、西の方より馬を寄せるに、なおも早まる太鼓と共に、双方等しく声を掛け、打つをひらりと受け流す。一往一来、劣らず優ず、

行き巡り巡り、索城が獅子の怒りをなせば、青柳は龍蛇の勢いあり。振り閃かす薙刀は雲間を漏れる月の如く、又、打ち掛かる 鉞 は岩根を走る稲妻に似て、人は人と相闘い馬は馬と挑み争う。蹄の音も刃の響きも拍子を揃えて目覚しく、既にして戦うこと六十余太刀に及べども勝負も果てず見えしかば、信種夫婦は云えば更なり、席にはべりし男女の輩、呆然として酔えるが如く、且つ呆れ且つ感じて、手に汗握るばかりなり。

その時、兵衛、宇野江は主君夫婦の辺に参って、  
「索城、青柳の武芸が比類なく、劣り勝りは候わず。今日よりして彼の者どもを女武者の教え頭に仰せつけられしかるべし」と言葉等しく申すにぞ、信種も十時御前もその喜びは大方ならず、やがて索城、青柳を東西へ引き分けさせて、辺近く呼び寄せつつ、  
「兩人共に女武者局の教え頭を務むべし」と云い渡させたまうになん、二人の女子は喜びの言受けを申しつつ、各々退きいでにける。

さればその夜、索城の朋輩（仲間）※らは皆々彼女の部屋に集って、喜びを述べ、酒盛り遊んで、いと賑わしく見えしかど、青柳は馴染みも無ければ、己が部屋に立ち帰り、一人寂しくその夜を明かしぬ。

しかれども是よりして人の頭と▼敬まわれ、我に疎からず立ち振る舞う女武者も多くなるままに、萬の務めに暇無くて、その年は暮れにけり。

かくて、その次の年、春は過ぎ夏が来て、五月初めの頃かどよ、難波津※を預かり守る天野の判官遠光の女武者に直蔭の稲妻、篠芒の朱良井とて、ことに武芸に優れたるこの二人の女らはある夜、遠光の下知を受けて、五六人の組子を従え、あちこちを打ち巡りぬ。

これらの由は詳らかに五の巻きに記すべし。

※難波津（なにわつ）：古代大阪湾に存在した港湾施設の名称。現在の大阪市中央区付近に位置していたと考えられている。

傾城水滸伝 第三編ノ三 曲亭馬琴著 歌川国安画

此の編の四の巻の終りに説きいだしたる直蔭の稲妻が暫くおくされば、又、太宰府には青嵐の青柳が女武者の教え頭となりし、次の年の夏の初めに頼家卿の落とし胤がしかじかの所にありと訴え申す者ありしかば、信種やがて召し捕って厳しく禁獄したりける。

さても鎌倉の將軍頼家卿は去ぬる建仁三年の秋七月に御母の尼御台政子御前と執権北条義時の計らいにより、伊豆の修善寺へ押し込められたまい。あまつさえ頼家卿の嫡男の一番君は比企の判官義員と共に義時の為討たれたまいぬ。かくてその次の年、元久元年の秋に到り、義時は密かに安達景盛を討つ手の大将として伊豆の修善寺へ遣わしつつ、浴室の内にして頼家卿を討ち奉れり。

しかるにこの頃、頼家卿の妾腹に当才の息女ありて、三世姫と呼ばれたまうを乳母夫婦が甲斐甲

斐しく懐にかき抱いて、西国に落ち下り、名を変え、姿をやつしつ、密かに育み参らす事、早や七年に及びけり。

かかりし程に情けを知らぬ里人がいかにしてか嗅ぎ付けけん。乳母夫婦を打ち殺し、矢庭に姫を奪い捕り、太宰府に具し参りて、事しかじかと訴えしかば、信種は大きに喜び、「幼少なる息女と云うとも緩かせにすべきにあらず。よくこそ絡め捕りたり」とて、その者には褒美を取らせ、三世姫を一間の内にいと厳しく閉じ込め置いて、両三人の女房を付け置き、さあ鎌倉へ送り遣わし執権の御計らいに任せばやと思えども、此の年頃は平家の残党、木曾の余類、或るいは義経、泰衡の恩顧の者、又は比企の判官、梶原などの一族の討ち漏らされたる者どもが山に籠もり海に浮かみて、多きは千人二千人、少なきにも五百六百と軍兵を集め、砦を構え兵糧を揚げにて、路地の妨げを致し由、しばしばその聞こえあり。

「去年の秋、太宰府より貢ぎの金三千両を鎌倉へ参らせしに、たちまち道にて奪い取られ、その盗賊の行方は未だ知れず。かかれれば此の度、三世姫を鎌倉へ遣わさんに、船路にもせよ陸にもせよ、曲者どもに奪い取られ、世の物笑いに▼なりぬべし。さればとて、数千の軍兵をもて送らせんは京都、鎌倉の沙汰が後ろめたし。いかがすべき」と思いかね、徒に日を過ごす程に、鎌倉の執権義時の奥方は十時御前の母上なるが、五月の初めに使い到来して、御消息(手紙)とて参らせしを十時御前は見たまうに、

「父君は此の程より、いささか暑さにあたせたまうて、心地例ならず御座しまするに、とかくに熱気の冷めたまわず、ある博士の申せしは筑紫太宰府の天満宮に納め置かれる天国の宝剣を枕に掛けて置かせたまえば、御悩平癒疑い無しと確かに考え申したり。

しかれども彼の宝剣は世に隠れなき靈宝なるを鎌倉より下知を伝えて取り寄すべくもあらずかし。小武殿の心にて、しばしが間借り受けて、とくとくおこしたまえかし。等閑にな過ぐされそ」と繰り返しつつ、書かれしかば、十時御前は驚いて、しかじかと告げたまうを信季聞いて眉をひそめ、

「只今、我らが勢いをもて、彼の宝剣を借りんと云えば、神主、祝※もいかでか否まん。まいて、執権の為なるをや。そこに障りはなけれども、もし道中にて曲者に奪い取られる事あれば、これも由々しき大事なるべし。されば彼の宝剣と諸共に三世姫を鎌倉へ送り遣わす宰領は智勇兼備の者ならでは必ず事を過つべし。さて誰をがな遣わすべき」と心の内に選めども、なおその人を得ざりけり。

※祝(はふり): 神主・禰宜(ねぎ)に従って祭祀をつかさどる神職。また、広く神職の総称。

[物語ふたつに分かる]

ここに又、難波津の守護たりし天野の判官遠景は先に滅び失せたる者どもの残党が隠れ居る事もやとて、捕り手頭の誰かれにくみこを大勢従わせ、あちこちへ使わせしに、一人も絡め得ざりけり。しかるに、此の頃、都には院の御所にて女武者を置かれしかば、国々の守護、地頭もこれに倣って、勇婦を抱え女武者と称えつつ、召し置かぬ者無き世なれば、難波の守護にも女武者あり。その中に直高の稲妻、篠芒の朱良井と云う二人の女武者は男勝りの智勇の者なり。その時、遠景思う様、

「・・・彼の稲妻、朱良井らは近き世の巴、板額にもをさをさ劣らぬ者どもなれば、今宵は彼女らに云い付けて、あちこちへ遣わすべし。女なれば、曲者らも或るいは侮り油断して、絡め捕られる事あるべしとて、思う由を彼の女子らに説き示し、心得させて、組子五七人を従わせ、その夜、西生、東生の村々へぞ遣わしける。

さる程に兩人東西へ引き分かれ、朱良井は西生の村々を打ち巡り、稲妻は東生の村々を巡る程に、荒れ墓の辺の朽ち傾きし観音堂の内に躰の音がしてければ、稲妻は心に訝りつつ、忍び松明を振り照らし、立ち寄りてこれを見るに、歳なお若き下衆女が大縞の一重衣の片袖を押し肌脱ぎ、黒き肌へを現わしたるが、ひどく酒に酔うたりとおぼしくて、前後も知らず伏して居り、稲妻これをつらつら見て、

「此は曲者ぞ、絡め捕れ」と下知に従う組子ども「承る」と答えつつ、押さえて縄を掛けんとするに、その女は驚き覚めて、心得たりと跳ね返し、先に進みし一人を掴み、礫に取って、表の方へ投げ退けたり。

されども多勢なりければ、いやが上に折り重なって、腕を捉え、足を押さえて、ようやく縄を掛けしかば、稲妻深く喜んで、しばらく休息すべけれとて、天王寺村に赴いて、村長小蝶の宿所に到りぬ。

そもそも国府天王寺の村々の庄役は此の時女持ちにして、その名を小蝶と呼びなしたり。彼女は代々東生郡の庄役にて筋目正しき者なるが、その親の時に至って、家を継ぐべき男子無く、只、この小蝶一人をもてり。しかるに二親世を去りし頃、婿を呼び迎えたまえとて、仲立ちする者多かりしかど、小蝶はこれを請け引かず、かくてはその家が断つべくもあらざりしを小蝶は男に立ち勝って力強く武芸を好み、且つ、算筆の技をさえ良くせずと云う事無ければ、村人ら国司に願って、小蝶を親の時の如く庄役に成し下されよと一郡挙って請い申せしに、女の時めく世なりければ遂にその儀に任されたり。

しかるに去ぬる年、西生郡の中津川の辺に妖怪が出て人を悩ますこと甚はだしかりけるに、ある山伏が里人に教えて、いと大きな石の塔を造らせて、これを中津の川端に建てしかば、それよりして妖怪は東生郡に移り来て、ここの里人を悩ますと聞こえしかば、小蝶はひどく打ち腹立てて、ある夜、只一人、中津川へ赴いて、その塔を引き担ぎ、静々と帰り来て、猫間川の辺に建てしかば、人皆、小蝶の勇力におち恐れずと云う者無く、これより彼女をあた名して夜叉天王の小蝶とも又、多力の小蝶とも云いけり。

閑話はさて置いて(閑話休題)、小蝶はその夜の丑三つ頃、不意に難波津の守護の女武者、直鶯の稲妻が夜回りの帰るさ(途中)なりとて、組子に門戸を叩かせしかば、忙わしく迎え入れ、客座敷に休息させ、俄かに酒肴を按配して、稲妻にすすめ、組子らには次の間にて、同じく盃をすすめしかば、組子らは絡めて来たる怪しき女を牛小屋の梁に吊り上げて、戸を引き閉て、皆諸共に次の間に酒を飲みけり。その時、小蝶は稲妻を労って、

「直鶯の刀自、夜中の勤役疲れたまわめ。いかに獲物のはべりしか」と問われて稲妻は

「然ればとよ、させる者にはあらざれど、荒れ墓の崩れ堂にて怪しき女を絡め捕ったり。その故は斯様斯様」と事詳らかに▼説き示し、

「この事を早く長に告げずば、後に国司より御尋ねのあらん時、御答えに不都合ならんと思えば、心得させん為、且つ休息もせま欲しさに、夜深に門を打ち叩いて、驚かしはべりしに、かく懇ろなるもてなしは心苦しくはべる」と云う。小蝶はこれを打ち聞いて、浅からぬ志の喜びを述べなどし



つつ、腹の内に思う様、

「・・・我が預かる村里には曲者絶えて無かりしに、直齋殿に絡められしはいかなる者にてあらんずらん。我その所へ赴いて、密かに見ばや」と思うになん、手代の老僕を座敷に出して、稲妻らをもてなさせ、その身はしばらく退いて、紙燭を照らして、只一人、牛小屋にぞ赴きける。

さて小蝶の心の内に今しかじかと思う由はその身に男魂あれば、年頃弱きを助け強きを挫き、施しを好み、財を惜しまず、もし一芸ある女子が不仕合せに身を置きかねて、頼み来る者あれば、いつまでも養い置いて、又、立ち去らんと云う時は路用を与え元手を取らせて、いささかも恩とせず、ここをもて、その名遍く世に聞こえ、徳とせずと云う事無し。されば小蝶がその女を密かに見まく欲するは心に彼女を哀れむ故なり。さる程に小蝶はやおら牛小屋の戸を引き開けて、灯し火を差し寄せ、つらつらとその女を見て、

「そちはいかなる悪事を成して、かくは絡め捕られしぞ」と問えば女もつらつら見返し、

「私いかでか悪事を成すべき。筑紫の果てより遙々と此の辺りに問う人あり。しかるに宵に酒を過ぐして、いと耐え難くはべりしままに、とある辻堂に休らって、心ともなく酔い臥したるを捕り手の人々が怪んで、訳も得問わず絡めしなり。さりとてわが身に犯せる罪無し。後に云い解く由もあれば、此の恥ずかしめを忍ぶのみ」と云うに小蝶は頷いて、

「しからは、そなたの尋ねる人の名は何と云うやらん」と再び問われて、

「然ればとよ、天王寺村に隠れも無き、夜叉天王の小蝶殿なり。彼の人に密議を告げて、世に二つと無き宝物を贈らんと思えばなり」と云うに小蝶は微笑んで、

「云われる小蝶は私なり。宝と聞いて愛づるにあらねど、私を尋ねて来る人をいかでか余所に救わで置くべき。今にもあれ、稲妻殿が出て行く時、そなた私を伯母と呼べ。私は又、そなたを呼んで、姪の小沼と云うべきぞ。その余の事は斯様斯様」と忍びやかに示し合わせて、又、忙わしく座敷に到って、稲妻をもてなしけり。

かくて盃の数も巡るままに、早や明け方になりしかば、稲妻は別れを告げて、立ちいでんとする程に、組子らは牛小屋に吊り上げ置きし、その女を引き降ろし、押し据えて、皆並み居たる門辺にて見送る小蝶はその女を見て、

「昨夜絡め捕られしは此の女子にてはべるか」と問う言葉、未だ終わらず、その女は声を掛けて「叔母様、我儕を救いたまえ。救いたまえ」と呼ばはるに、小蝶はわざと驚きながら、火影に立ち寄り、つらつらと見て、

「おのれは鹿間の小沼じゃないか」と問われて、再び声を振り立て、

「いかにも小沼ではべるなり。年頃、敷居が高ければ訪れもせざりしかど、奉公しても果々しからず、又も叔母御を頼まんとするて遙々来たれども、夜食代わりの腰掛酒を飲み過ぐせしより酔うたるに、このまま行かば叱られん、しばらく酔いを醒ましてこそと、道の辺の辻堂に憩いてしばし微睡みしに、この人々が見咎めて、訳も正さず情け無く、矢庭(急に)に絡め捕られたり。救いたまえ」とかき口説けば、小蝶はわざと睨まえて、

「能無し女めが又しても奉公も得せず、難波三界彷徨う事か。さまでに酒が飲みたくば、我宿へ来て飲みはせで、女子だてらに腰掛酒に酔うたればとて、辻堂に転寝をする事やはある。どうしてくりょう」と息巻いて、辺りに有りし竹杖をおっ取り上げて打たんとするを▼稲妻急に押し止めて、

「庄役いたくな怒りたまいそ。私も実はこの女子が犯せる罪の有り無しを知らず、又庄役の姪ならんとは夢にも知らぬ事なれば、只装束の異様なると一人辻堂に酔い臥したるを心得難く思いしかば、かく絡め捕らせしのみ」と云うに小蝶は面を和らげ、

「世に恥ずかしき事ながら、此奴は播磨の鹿間の姉の子ではべるなる。歳十一二なりし頃、一度ここへ呼び寄せしに、女子に似気無きわがままの心しぶとき者なれば、追い返せしより既に早や十歳余りの月日を経たれば、私は見忘れてりけれども左の方の鼻の脇に赤く大きな黒子あり。それのみ忘れざりければ、早く小沼と知れるなり。彼女の二親は身罷って、今に縁を定め得ず、こちら辺りへ彷徨い来て、叔母の顔に泥を塗る腹立たしさよ」と息巻いて再び打たんと進み寄るを稲妻は間に押し隔て、

「云われる趣は理なれども、若き内の心得違えは誰が上にも無きにはあらず。御身の姪御をいかにして、このままに引きもて行かれんや。いざいざ受け取りたまえ」とて、組子に下知して、その女の縛めの縄を解き許し、小蝶に渡して別れを告げて、そのまま帰り去らんとするを小蝶はしばしと押し止め、

「数ならねども私が面にめでて許させたまいぬる。此奴の為に喜びを述べずに返し参らせんや。しばし此の方へ入らせたまえ」と割なく留めて座敷へ伴い、紙に包みし金千匹を折敷※に載せて贈りしを稲妻しばしば押し返せども、小蝶はなおも言葉を尽くして、

「かばかりの物を受けたまわらずば、私の心は安からず。まげて受け引きたまいね」としきりにすめて止まざりければ、稲妻は遂に否みかね、ようやくに受け納めしかば、小蝶は又、組子らにも銀一包みづつ贈りけり。

※折敷（おしき）：「へぎ」を折り曲げて縁とした角盆、または隅切り盆。

とかくする程に、夜はしらじらと明けしかば、稲妻は忙わしく組子を引き連れ、暇乞いして屋敷へとてぞ帰りける。稲妻は組子を連れて、既に帰り去りにければ、小蝶はそのまま彼の女子を奥の座敷へ伴って、酒食をすすめて新しき衣装を取らせて着替えさせ、

「先にははばかりの席ありしかば、未だ御身の何をだに問はず。御身は真に筑紫の人か、いかなる事のあるにより、我方へとて来たまいしぞ」と問えば女子は左右を見返り、

「我上つぶさに告ぐべきに、辺りの人を遠ざけたまえ」と云うを小蝶は聞きながら、

「ここにはべる者どもは全て私の腹心なれば、いささかも苦しからず。さあ打ち出して示したまえ」と云うに女子は膝を進めて、

「何をか包みはべるべき。私は筑紫の田代の者にて、名を味鴨と云う者なり。私の髪の色は赤ければ、人あだ名して赤頭の味鴨と呼びなしたり。父は鎌倉二代の將軍頼家卿の近侍の侍、富部の五郎高義なり。今より十年先の秋、執権北条義時の計らいにて頼家卿が修善寺にて、あえなく討たれたまいし時、我が父は討ち死にして、母は乱軍の内に討たれたり。その時、私は十二才、頼家卿の息女の三世姫に具し奉りて、筑紫の田代に落ちとどまり、よそながら姫上に宮仕えしはべりにしに、里人らの悪心にて大勢俄かに押し寄せ来て、姫上の乳母の小坂の九郎夫婦の者をたちまちに討ち殺して、姫を奪い奉り、やがて筑紫の探題の小武信種に渡してけり。

その折私は居合わせず、事の変を聞くと等しく宙を飛んで帰ると云えども、事果てて後の事なれば、いかにも詮術無きに、そのまま田代を逐電して、あちこちに身を隠し、いかにもして姫上を

取り返さんと思えども、身一つにては叶うべからず、この天王寺村に隠れ無き、夜叉天王小蝶の刀自は武芸力量、女に似気無く弱きを助け強きを挫き、義の為には身をも忘れて、財を惜しみたまわずと、予ねてより聞きしかば、思う心を密かに告げて、いかで助けを借らんとて▼遙々尋ねて来たりしに、さきに辻堂に酔い伏して、稲妻とやらんに生け捕られ、思わずここへ引きもて来られて、不思議に御身に救われしも、これ又、奇縁と云うべきのみ。いかに受け引きたまわんや」と云うに小蝶は頷いて、

「私とても親の時より、鎌倉の將軍家の御恩によって、かたの如く四五か村の長者をすなれば、頼家卿の御落命、彼の義時の肝悪をいかでか憎しと思わざらんや。まいて頼家卿の姫上さえ囚われとなりたまうはいと痛ましき事になん。かかればその儀に一味の事は元より願うところなれども、筑紫は道がいと遠く奪い取るべき頼りを得ず」と云うに味鴨微笑んで、

「その儀は氣使いたまうべからず。私ほのかに伝え聞きしは小武信種、人をもて、三世姫を鎌倉へ送り遣わす用意あり。且つ義時の病氣平癒の為、天国の宝剣を宰府の社より借り取って、鎌倉へ贈ると云えり。義時なんらの徳あって、天満宮の神宝の御剣を軽々しく鎌倉へ呼び下すや。この事も又憎むべし。先に得難き宝物を御身に贈り参らせんとて、遙々尋ねて来ると云いしは三世姫と天国の宝剣を云えるなり。私も元より武芸をたしめり、時日を探り、途中に於いて待ち伏せして奪い取るべし。この義はいかに」と囁けば小蝶はしきりに頷いて、

「しからんには事を起こす、いささか便宜あるに似たれど、なおも味方を語らって計り事を定むべし。まずまず休息したまえ」として小座敷へ伴って、小蝶は奥へぞ退きける。その時味鴨思う様、「……我、思わずも小蝶の刀自の情けによって、縄目を免れ、又、彼の密議に一味せられて、もてなされる事、大方ならねど、未ださせる報いをせず。さるにても彼の稲妻めは見留めたる咎も無き、私を酷く縛めて、小蝶殿より金を取り、したりし顔せしけ憎さよ。遠くは行かじ追っかけて、金取り返して小蝶殿に渡すが当座の恩返し。そうじゃそうじゃ」と腹の内に思案をしつつ辺りを見るに、壁に掛けたる一振りの仕込み杖がありしかば、「これ究竟」と脇挟み、裳裾かかげて庭口より後を慕って追って行く。かくとも知らぬ稲妻は既に小蝶の宿所を出て、いささか道に立ち寄る方あり。それより更に道を急いで、野田の辺まで来ける時、後より我を追う者あり。誰なるらんと見返りつつ、しばらくそこにただすお程に、味鴨早く追っかけて来て、眼を怒らし声高やかに、「貪欲者の稲妻待て。先には汝は咎も無き、我儕をひどく縛めて、我が叔母に謎を掛け(催促)、数多の金を貪り取って、ぬくぬくとして帰るともいかでかそのまま帰すべき。金を我儕にさあ戻せ」と云うに稲妻呆れ果て、

「此奴は氣でも違いしか。許し難き奴なれども汝の叔母の面にめでて、その縛めを解き許せしに、かたじけ無しとは思ひもせず、我が懐を目掛けて来たか。叔母御の贈りし金なるに、おのれに返す事やはせん。さあさあ帰れ」と息巻けば、味鴨いよいよ罵って、

「返さねばとて取らず置くべき=いやいや返さぬ=いや返せ=そりや又どうして=こうして取るは」と仕込み杖をひらりと抜いて討ち掛ければ、稲妻も又、抜き合わして丁は発止と戦ったり。

さればまた、この野田の里に呉竹と云う女博士あり。あちこちの女の童を集めて、手跡※を教え、又、大和、唐土の文を教えて生業とする▼者なるが、智慧いと深い女なれば、人あだ名して智慧海の呉竹と呼びなしたり。

※手跡：書いた文字、筆跡。

さればこの呉竹は稲妻とは知れるだちにて、小蝶にも疎からず、この明日起き出て、自ら門の戸を開ければ、相知ったる稲妻が一人の女子と物争いして、互いに刃をひらめかし、二打ち三打ちと戦う程に、呉竹あわやと押し止めて、まずその訳を尋ねれば、稲妻は息付きあえず、「昨夜、味鴨を絡め捕りし其の事の始めより、彼女は天王寺村の庄役小蝶の姪なるに、よって邪正も正さで許せし由を物語り。その折小蝶はその喜びとて、ちとの物を贈りしを此の女子が妬く思つて取り返さんとひしめく故に、事のここに及びしなり」と云うを呉竹は打ち聞いて、心の内に思う様、

「……我儕年頃、小蝶殿と事に親しく交われども、姪女の在りし由を聞かず、且つ叔母姪の年恰好も不相応に見えたれば、これには深き訳あるべし。まず双方を宥めてそ」と思案をしつつ、様々に言葉を尽くして諭せども、味鴨はとにかく贈りし金を返せと云う言葉戦い再び募って、またまた挑み戦うにぞ。呉竹も止めかねて、詮方も無く見えたる折から、天王寺村の方よりして息を計りに駆け来る者あり。

これすなわち小蝶なり。近づくままに声を掛け、味鴨を叱り止めれども切り結びたる最中なれば、ちっとも聞かず、踏み込み、踏み込み、勢い激しく闘えば、稲妻は遂にあしらいかねて、受け太刀にのみなりしかば、従う組子ら堪えかね、助太刀せんとぞ身構えたる。

その時、小蝶は走り着き、辺りに在りし桂石をいと軽々と取り上げて、討ち合はしたる刃の中へ、おしにどつさり押し据えて、その身も共に尻を打ち掛け、味鴨をひどく叱って、稲妻を宥めしかば、兩人これに心解けて、ようやく刃を収めつつ、稲妻は味鴨の体たらくを小蝶に告げて、

「その金は御身より贈られたる物なれば、再び御身に会わぬ日に返さんと思ひしのみ。姪御に返す由が無ければ、争い募って鎬を削れり。既に御身の来たまう上はこの金を返すべし」と云うを小蝶は聞きながら、

「いかでかはさる事はべらん。皆、我が姪の氣随(わがまま)※に任せし、無礼は許させたまえかし」と言葉を尽くして詫びしかば、稲妻これに心解けて、互いに遺恨あらじとて、和睦をしつつ、元の如く組子を引き連れ、忙わしく天野の屋敷へ帰りける。

その時又、呉竹も小蝶に在りし次第を告げて、

「私も先に止めしかども姪御の武芸は世の常ならねば、稲妻殿もあしらいかねて、受け太刀にのみなられたり。去るを御身の来たまう事が今少し遅かりせば、稲妻殿は手を負って、事の大事になるべきに、幸いにして収まりしは大方ならぬ喜びなり。しかるにいと訝しきは播磨に御身の姪ある事は今日までも知らざりき。真の姪御ではべるか」と問われて小蝶は打ち微笑み、

「その疑いは▼道理なり。是には故ある事ぞかし。まず我が宿所へ来たまえ」とて、呉竹をも伴つて、天王寺村へ帰りつつ、奥座敷にて酒をすすめ、さて、味鴨の事の趣の初めより終わりまで、呉竹に告げ知らせ、

「私は去ぬる夜、夢心に北斗七星が我が家の後ろに落ちると見たりしに、又一つ小さき星が後より落ちると夢見て覚めたり。星を夢に見る者は萬に利ありと聞きたるが、此の度思い起こす事の成

就するさがならずや」と云えば呉竹くれたけうなず頷いて、

「我も人も義時の道ならぬ計らいをよしどき 憤はからずと云う者稀いさどおなり。かかれば三世姫さんせひめを奪い取って、国に忠義ちゅうぎを尽くさん事、私も願をらわう事ぞかし。さりながら一味いちみの輩ともがら大勢にては返って事の妨げならん。さればとて、此の三人みたりのみにては事足るべくもあらぬなり。近江の国の唐崎おうみの漁からさきりすなど※人に三人の姉妹あり。第一の姉を大歳麻二網おおとしまふたあみと云えり、その次を氣違水きちがみずの五井いつついと呼びなしたり、第三の末の妹をきしぼじんななわたななわたと云うなり。この姉妹は新田にったの四郎忠常しろうただつねの家の子めい（家臣）なりし、三崎みさきの七郎利光しちろうとしみつの為には姪めいなり。先に忠常ただつねが滅び失せしより、姉妹三人みたりは唐崎からさきにて網を引き、釣りを垂れ、いと貧しくは世を渡れど、男に劣らぬ魂あり。私わらわが近江に在りし時、疎うとからず交わったり、彼の姉妹まじを語らえば、そは究竟くっしょうの助けかようとならん。計り事かようは斯様ひたい斯様」と額くれたけを合わせて囁き示せば、小蝶かはかく喜んで、用意の金子きんぎょ一包ひとつかみみを呉竹に渡しけり。

※氣隨（きずい）：自分の思いのままに振る舞う・こと（さま）。 ※漁り（すなどり）：①漁をすること。②漁をする人。漁夫。

かくて呉竹はその日俄かに門出かどででして、日ならず近江の唐崎からさきに赴おもむきつつ、まず二網ふたあみの宿所しゆくしょに到るに、二網は早く出迎えて、

「此は珍らし。先生せんせいはいかなる風に吹き送られて、ここらへ来させたまいしやらん」と笑みつつ云えば、呉竹もからからと打ち笑い、

「ちと頼たのみたき事あれば、遙々はるばると来るなり。いかに二人の妹御いもうとごも各々おのおの宿おに居られるか」と問えば二網、

「然ればとよ、五井いつついは釣りにやいでたる。七曲ななまがらは何処いずこへ行きけん。そこら一辺尋ねて見ん。いざたまえ」とて水際の小船みづぎわに乗せて、あちこちと入り江、入り江を漕ぎ巡るに、一群ひとむら茂まこもき真孤まこも※の中に一艘そうの釣り船あり。二網ふたあみややと声を掛け、

「そは五井いつついにあらざるか。智慧海ちえのうみの先生にわが難波しゅうより来ましたり。そなた衆しゅうを打ち集えて語らう事のあり」とし云えば、さあさあと急がすにぞ、五井いつついは「おう」と答えて、そのまま船を漕ぎ寄せつつ、呉竹は対面して、別れし後の無事をことぶ 寿ふたあみき、姉の二網ふたあみ諸共さかざきに盃からさきをすすめんとて、又、唐崎の方へ漕ぎ戻すに、入江橋いりえはしの辺ほとりにて、七曲ななまがらが一徳利たすきの酒しゆくしょを携たすえて宿所の方へ帰るを見つつ呼び留め、船を寄せて、そのままに乗り移らせれば、七曲も又、呉竹に口誼くちぎ※を述べて、まず船中のもてなしにとて、その酒を打ち開ければ、五井いつついは釣りせし魚いづこを一つへつひ 籠かごに押しくべて、焼いて肴さかなにすすめけり。

※真孤（まこも）：イネ科の大形多年草。水辺に群生。 ※口誼（口義）：口頭で挨拶を述べること。

その時、呉竹みたりは三人の姉妹に打ち向かい、

「私わらわは去ぬる頃よりして、天王寺ぼとりの辺ほとりの富める人の娘たちの素読そどくの師匠うやまと敬われ、その家屋敷ほとりの辺ほとりに居るなり。しかるに彼の人かが近き日に寿あまたきの由まねあって、数多おんみの客おんみを招かれる。これにより長さ二尺五寸の鯉こい十本と一尺余りの源五郎げんごろう鮒ふな六十枚むそくを求められる。これを御身おんみら姉妹みたりにあつらえんとて来るなり」と云うに三人は眉まゆをひそめて、

「鯉鮒こいは此の地の名物。さばかりの注文こはいと易かるべき事なりしをいかにせん、今ではなかなか一尺余りの鯉こいだにも絶えて得難し。その儀いは許したまえかし」と否いなむを何ぞと故ゆえを問えば、三人答えて

「然ればとよ、さる大きな鯉鮒こいは此の湖の内いいうらにても飯浦やまなし、山梨やまなし、片山かたやまの辺ほとりに多かり。しかるに近

頃、賤ヶ岳に三人の山立ち(山賊)あって、数多の手下の軍兵を集めたる。第一の頭領を賽博士巨綸と云い、その次を天津雁真弓と云い、又、その次を女仁王杣木と云えり。かくて又、去ぬる頃よりして、虎尾の桜戸と云う勇婦が馳せ加わって、勢い最も強大なり。彼の山立ちの勇婦の面々は賤ヶ岳に砦を構えて、飯浦と余呉川を境とし、数多の村里を横領したれば、我々までも世渡りの方便をそこに狭められ、絶えて彼処へ行く事得ならず。この故に御注文の鯉鮒は我々の力に叶いはべらず」と云うに呉竹は小首を傾け、

「聞くが如きは彼の勇婦らは先亡の残党にて、すなわち謀反の輩なり。しかるに、なぞて公より討手の軍兵を差し向けたまわで、都近き島山を棲家にせられたるやらん」と云えば三人は言葉ひとしく、

「それには故ある事なるべし。今、都には白拍子の亀菊の沙汰として、非法の事ども少なからず。▼又、鎌倉には執権義時が密かに頼朝卿の御子たちを押し倒さんと謀る故に京も又、鎌倉もとにかくに事の多くて討手の沙汰に及ばずとぞ。実に今の世の有様は京、鎌倉に非法多くて、頼朝卿の御子孫のある甲斐も無くなりたまうはいと口惜しき事になん。我われも手下を集めて、山籠もりする力あれば、かく味気無き世渡りをするには遥かに増すべきものを」と拳を摩り、齒を食いしばって、しきりに恨み憤れば、呉竹は小膝をすすめて、

「各々が云われる趣に露ばかりも偽り無くば、密かに語らうべき一議あり」と云うを三人は聞きながら、

「鎌倉殿の御為になる事ならば、命も惜しまず、さあ打ち出したまいね」と云うに呉竹頷いて、「さらば大事を明かすべし。その訳は斯様斯様」と三世姫の事よりして、小蝶、味鴨が心を合わして、道にて奪い取らんと謀れども未だ一味の人数足らず、これにより各々を語らわん為に鯉鮒を求めに来ると云いしなり。彼の儀を受け引きたまわんや」と云うに喜ぶ姉妹たち、

「それこそ願うところなれ。この酒も早や尽きたるに、狐松楼にて飲み直さん」とて、唐崎の辺なる仕出し酒屋へ船を漕ぎ着け、皆々二階へ打ち上り、酒をいださせ、肴を添えさせ、差しつ押さえつ日の暮れるまで、酒宴に時を移しけり。

傾城水滸伝 第三編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

かくて三人の姉妹はなお酒肴を買い求め、呉竹を伴って再び船に打ち乗るに、これらの値は皆こと如く呉竹が償いしを二網らはとにかくに呉竹には出させじとて、姉妹ひとしく否みしかども呉竹も又、従わず、

「此は我が路用の内ならず。小蝶の刀自がその為にとて渡し置かれし金なれば、否むは返って、彼の刀自の志にもとるに似たり。ただ打ち任せて置きたまえ」と云うに姉妹は感心して、「実に、彼の刀自は財を惜しまず、男魂ある女子と交わりを結びたまうと聞きしは空言ならざりき」とて、しきりに褒めて止まざりけり。

さる程に船は早二網の門に着きしかば、皆、諸共に宿所に集って、その夜又、彼の酒肴を開いて呉竹をもてなすにぞ、呉竹は忍びやかに、その密議を云い出て、

「いかに各々小蝶殿の大望に一味の事はいよいよ相違あらざるや」と云われて三人は一議に及ばず、  
「そは又、宣うまでも無し。我々は新田殿の余類にてはべる由は先生も知りて御座さめ。忠常主は  
源家の忠臣、頼家卿の御時に義時と戦って、遂に討ち死にしたまいき。我々女なりと云うとも、  
かかる大義に加わる事は真に此上無き幸いなり。例えその事得遂げずして、身は八つ裂きにならば  
なれ。一味同心変改(改心)※あらず」と言葉を放って答えしかば、呉竹は深く喜んで、

「しからんには明日の朝、私と共に難波へ赴き、小蝶殿に対面して、なお密談をこらしたまえ」  
と云うに姉妹はその儀に任せて、その明けの朝、呉竹諸共に難波津へ赴く程に、次の日、未の頃  
おいに天王寺村へ着きしかば、呉竹はしかじかと小蝶に由を告げ知らせるに、小蝶は斜めならず喜  
んで、忙わしく出迎えて、二網ら三人を奥座敷へ誘って、茶をすすめ酒をすすめ、

「聞き及びたる姉妹たち、縁無しとのみ思いしに、居ながら面を合わせる事、喜びこれにますもの  
無し」と云うに三人は言葉ひとしく、

「此の難波津に隠れ無き、夜叉天王の多力の刀自。会わぬ先から親しく思いし▼事が今日叶って対  
面を遂げさせたまうは大方ならぬ幸いなり。智慧海先生に密義は伝え聞きはべりぬ。用いたまう由  
あれば、共に力を尽くすべし」と世に頼もしく答えるにぞ、小蝶はいよいよ喜んで、味鴨を招き寄  
せ、二網ら姉妹に引き合わせつつ、呉竹と諸共に六人は額を突き合らし、閑談時を移す折から、男  
どもが走り来て、

「只今、女の陰陽師が門に立って御旦那に対面せんと申すなり。いかが計らい候わん」と告げるを  
小蝶は聞きながら、

「あな、心無き者どもかな。常に心を得させし如く、さばかりの事なるに、取り計らいの得ならず  
して、客人たちと物語りする言葉の腰を折る事やある。いつもの如く銭と米をとく取らせよ」と息  
巻けば、男も頭を搔きながら、

「そは仰せまでも無く、米一升と銭百文を折敷に載せていせしに、彼の者それを取らばこそ、我  
らは物を貰わん為に、遙々と来るものかは。早く主に会わせよと、罵り狂い候なり」と云うに小  
蝶は押し返し、

「そは物の少なき故に我らに会わんと云うならん。銭一貫に米五升、増し与えて云うべきは旦那は  
只今客あって早速御目にかかり難し。近き程に又、来たまえと云うて、さあさあ返せよ」と諭せば、  
その下男は心得果てて退きける。

※変改(へんがい): ①変えて改めること。②約束を破ること。

しばらくして表の方が俄かに人声騒がしく、物音高く聞こえしかば、あれはいかにとばかりに皆々  
耳をそばだてる程しもあるはず、一人の男があわただしく走り来て、

「仰せに任せて、女巫女に銭米多く取らせしに、彼の人のいよいよ腹立てて、いかなれば汝らは主に  
は会わせずして、我儕をかくは侮るや。その儀ならば踏み込んで、対面せんと罵り狂って、支え  
る者を突き倒し、或るいは投げ退け踏みじる、女に似気無き力量早業、手にこそ余り候なれ」  
と言葉せわしく告げるにぞ、小蝶は騒ぐ気色も無く、人々を見返って、

「聞かれる如き訳なれば、しばらく許したまいね」と云いつつ、やがて座を立て、表の方に走り  
出て、荒れに荒れたる女巫女に打ち向い、言葉を掛けて

「やよ、客人、鎮まりたまえ。私即ち小蝶なり。人を得知らぬ男どもが無礼を許して云う由あれ

ば、さあさあ私に告げたまえ」と云うにその女巫女は面を和らげ手を止めて、

「聞き及びたる多力殿。得難き二つの宝物を贈り参らせんと思いつつ尋ねて来るに、取次人が得会わせずして、銭を贈り米を贈るが腹立たしさに事のここに及べるのみ」と云うに小蝶は微笑んで、「しからんには此方へ」と、先に立ちつつ客座敷へ迎え入れ、茶をすすめ、その姓名を尋ねれば、女巫女は声を潜めて

「私は事は陰陽博士阿部の泰彦の一人娘、著と呼ばれる者なりかし。父泰彦は建久の頃、頼朝卿の招きによって、鎌倉へ参り仕えしに、執権北条時政に忌み嫌われて、罪ならぬ無実の罪をこうおって、たちまち都へ追い返され、幾程も無く身罷りにき。私は女の事ながら、親の術を受け伝え、占いの上は更なり。彼の式神を使うをもて、雲を呼び風を起こす秘術までもよくすれば、世の人私をあだ名して指神子著とも又、雲間隠の龍子とも▼呼びなしたり。しかるに御身は志ある女子を愛して、義の為には財を惜しまず、多く得難き女丈夫なりと伝え聞きはべるから、世にも稀なる宝物を参らせんとて来るなり」と云うに小蝶は喜んで、

「我らも又、予てよりその名は聞きし、指神子著殿で在りしよな。宝と云うはいかなる物ぞ」と問うに著は膝を進めて、

「宝と云うは斯様斯様三世姫の事の趣、又、天国の宝剣さえ筑紫の探題信種が此の度、鎌倉へ送り遣わすと云う風聞を告げ知らせ。とにもかくにも痛ましきは幼き姫上の御事なり。謀り事を巡らせて、道にて奪い取るならば、国の為に忠義にして、頼家卿の亡き魂をいささか慰め奉る。又、忠臣と云うべきのみ。これを御身に告げ知らせて、語らわんとて来るなり」と云う言葉未だ終らず、たちまち後ろに人ありて、著の襟首かい掴み、

「大胆不敵の女めが謀反の企て早や聞いたり。覚悟をせよ」と罵るにぞ、著は顔色土の如く表れけりと驚き恐れて、陳ずる由も無かりけり。

その時、小蝶は打ち笑い、

「先生、戯れせずもあれ、まずまず対面したまえ」と云うに彼の人ほほ笑んで、やがて方辺に座を占めれば、小蝶は著に打ち向かって、

「今、告げられし趣は此方にも早や思い立って、一味の人々集いて居り。此は智慧海先生なり。三世姫を奪い取る第一の軍師にこそ、はばかりべき人にはあらず」と云うに著も打ち笑い、

「さては上手く遊ばれたり。その名は高く聞こえたる智慧海の先生よな」と云うに呉竹進み向って、「人伝ながら、予ねて知る雲間隠れの龍子主、ここにて会うも宿世の良縁。いと喜ばしくはべり」と云う互いの挨拶こと終われば、小蝶は著、呉竹を奥座敷へ伴って、味鴨、二網、五井、七曲らに引き合わせ、更に又、酒肴を添えて、著に酒をすすめけり。その時、呉竹が云いけるは

「多力主の夢に北斗七星が家の後ろへ落ちたりと見たまいしはこの七人に応ずるなり。かかれば一味の面々はこの他を求むべからず。但し、三世姫を鎌倉へ送り行く者はいずれの日に太宰府をうち発って、船路を行くや陸地を行くや。その道筋を詳らかに探り知らずばあるべからず。この事は味鴨殿の案内の上なれば、御身は明日の朝に発足して聞き定め、とく告げたまえ」と云うを著は押し止めて、

「その事は心安かれ。私つぶさに探り得たり。三世姫を送り行く、その輩は水無月朔日(一日)※に宰府を発って、陸地を行くなり。かくて播磨の明石より、摂津の兵庫を経て、摩耶山を打ち越え、生田の森より難波へかかり、さて大和路を下ると云えり。此の事ちっとも相違無し」と云うに小蝶



は喜んで、

「しからんには我々がその路に出迎えて謀り事を行わんに、摩耶山こそ究竟ならぬ。さりながら、彼の地に▼しばらく逗留して、待ち合わせる日数の程、中宿無きをいかがわせん」と云うを呉竹聞きながら、

「摂津の兵庫の片辺の勝山村と云う所に昼鼠白粉と云う女あり。彼女は勝栗返の髪八と云う百姓の女房にて、ことに貧しき者なれども心映えは義に勇み、男に勝る魂あり。私、彼の白粉とは予ねて知ったる仲なれば、彼女を味方に増し加わえ、その宿所を宿とせん。先に主の刀自の夢に又、小さな星一つ、後より家の後ろの方へ落ちたりと見たまいしは又、彼の白粉に応ずるなり」と諭せば皆々喜んで、

「人数も場所も早定まりぬ。呉竹先生な思慮あらん。彼の姫上を奪い取る手立てはいかに聞かま欲し」と云えば、呉竹打ち笑みて、

「力をもて取るべくは力をもて彼を討つべし。又、知恵をもて取るべくは謀り事を用うべし。これらは臨機応変にて、只今は定め難し。各々口を慎んで、密議を他所へ漏らすべからず。この事最も肝要なり」と云うに小蝶は頷いて、

「云われるところ、真に故あり。唐崎の姉妹はまずまず近江へ立ち帰り、その後及んでとく来たまえ、智慧海先生も宿所に帰って、常の如く手習い子供を集めて在るべし。只、指神子と赤頭はこの奥の間に逗留して、なおも密議を語らいたまえ」と云うに皆々その意を得て、二網姉妹三人は次の日近江へ立ち帰り、呉竹は宿所に帰って、遠近の女の子らに手習い読書を教えつつ、夕暮れ毎に多力の奥座敷へ来て、人々となお密談を凝らしけり。

○ここに又、太宰府の信種は探題の勢いもて、天満宮の神主らに鎌倉の下知を伝えて、天国の宝剣を借り出して、三世姫と諸共に鎌倉の北条家へ送り遣わさんと思うものから、先亡の残党が処々の山に立て籠もる折からの事なれば、道にて異変あらんには後悔そこに絶ち難し。この使いには誰をがな、遣わすべきと定めかね、▼と様こよう様※思いつつ、次の日又、この事を十時御前に語らうに、十時御前は次の間の青柳を指差して、

「殿は月頃あの女子の知恵賢しきを誉め、武芸を誉めて、女武者の教え頭に取り立てたまいし者にあらずや。されば此の度、三世姫と宝剣を守護させて、鎌倉へ遣わす使いには彼女にますものあるまじけれ」と云われて信種は頷きつつ、

「御身の意見はその理あり。それがしは今まで青柳の事を忘れてたり。彼の者真にしかるべし」と答えて、やがて青柳を辺近く招き寄せ、さて、三世姫と宝剣を鎌倉へ送り遣わす事の意味合いをしかじかと詳らかに説き示して、

「此はいと大事の使いなれば、そちを選んで用いるなり。道中非常の為なれば、手勢二三百人従わせん。よく務めよ」と仰すれば、青柳は謹んで、

「御掟(おんおきて)の趣を承って、否み申すにあらねども、よしや百人二百人、雑兵を差し添えたまうとも、事ある時には皆逃げ失せて、物の用には立つべからず。私が申す由に任せて、穩便の御沙汰あれば御請けを仕らん。さなくば余人へ仰せ付け下されたし」と申すにぞ、信種聞いて眉をひそめ、

「手勢多くて悪しと思えば、そはともかくも汝に任せん。しからば又、いかにして無事なるべきと

思うぞや」と問われて青柳は小膝を進めて、

「私が手立てに任せたまえば、三世姫を物々しく網乗り物などに乗せ奉り、遣わされんは返って危うし。只、富める郷の妻娘などが慰みがてらに物参りする旅姿に装束して、三世姫は世の常なる旅籠に乗せ参らせ、私その相輿に打ち乗って守護すべし。さて人足は籠かき四人と物持ちの者両三人、上下十人に過ぎざる時は全て人目に立たずして道中安穩なるべし」と云うに信種頷いて、「その謀り事は真によし。さらば老女字野江の相役なる世和田の局と奥付きの雑掌 渋川栗太夫ならびに、表使いの者、樽垣衛門太らを差し添えて、相談相手に遣わすべし。この儀を心得候へ」と云われて青柳頭を傾け、

「その儀ならば、此の御使いは余人へ仰せ付けらるべし」と云うを

「とは又、いかに」と信種問うに、青柳は又、云う様、

「彼の世和田も栗太夫らも皆、重役の者にして、私が指図を受けざるべし。私の指図を受けるを恥て、難渋をのみ云われれば、此の度の御用を勤め難し」と云うに信種「実にも」と悟って、

「その儀はちっとも氣遣うべからず。我今、彼らと呼び寄せて、厳しく言い付け得さすべし」と諭して、やがて世和田を呼ばせ、又、栗太夫と衛門太も呼び寄せて、鎌倉行きを命じ、

「万事に青柳の指図を受けて、その進退に任すべし。もし偏執※を差し挟み、いささかたりともその意に違えば、帰府の後、罪を正して汝らを許す事無し。皆心得よ」と仰すれば、三人ひとしく事請けして、かしこまりてぞ退きける。

※とさまこうさま：ともあれこれ。あれやこれや。

※偏執（へんしつ）：片寄った考えをかたくなに守って他の意見に耳をかきしないこと。

かくて又、信種は青柳を近づけて、

「彼らにはしかと言いつけ置いたり。門出の日はいつ頃ぞや」と問われて、青柳一議に及ばず。急がせたまう事なれば、明日門出を仕らん。しからは水無月末つ方に鎌倉に到るべし」と云うに信種は喜んで、

「明日は水無月朔日（ついたち）なり。日並良ければ発足すべし。但し、天国の宝剣は栗太夫に持たせ遣わし、十時御前の消息（手紙）は世和田の局に持たすべし。なれどもこれを汝に渡さん。汝より彼の者どもへ渡せば下知に従うべし。いでいで」と云い掛けて、彼の宝剣を取り寄せて、青柳に渡させければ、十時御前も母君へ参らせたまう一封を青柳に渡したまう。青柳これらを受け取って、その身は詰め所に退きつつ、世和田らの三人に門出の日を告げ知らせ、皆諸共に招き寄せ、

「此の度の御使いは大事の役義にはべるから、各々全て姿をやつして馬籠には乗りたまえ。その余の事は斯様斯様」と事つまびらかに説き示して、彼の二品を取り出だし、

「これはこれ、御前様より母上に参らせたまう消息（手紙）にはべるかし。世和田殿の襟に掛け、片時も身を離ちたまうな。又、此の一振り天国の宝剣なり。此は栗太夫に持たせよと殿様の仰せなり。いずれも大切の御品なれば、その心得あらま欲し。私は三世姫を守護すなれば、相輿に乗りはべらん。衛門太殿は籠脇に付き添って心を配り、人足らを追い回し、過ちなからん様にとのみ念じたまえ。但し、籠の者は四人と定めて、その二人は手替わりなり。雨具とその余の持ち人足は三人にして一人は手替わりたるべし。かかれれば上下十二人なり。例え人足らが願うとも道中の雲とか云う者どもを雇うべからず。この儀を心得たまえかし」といと厳かに説き示して、彼の二品を渡しにけ

れば、世和田は更なり、栗太夫も衛門太も呆れ果て、いと口惜しく思えども、主命ならば一議に及ばず、おめおめとして退きつつ、旅の用意を整えける。

○かくてその明けの朝、青柳はその付き付き(付き人)※より三世姫を受け取って、旅乗り物に▼乗せ参らせ、その身も共に相興にて、宰府の城を門出すれば、世和田は消息(手紙)を入れられたる皮文箱を襟に掛け、栗太夫は宝剣を背負いつつ、衛門太も諸共に皆乗り物に引き添って、東を指して発ちいでけり。かくて行くと行く程に、早三日四日と旅寝を重ね、暑さに耐えぬ人々はようやくに疲れを増して、いとど苦しく思えども、青柳ちっとも容赦せず、只人足を罵って、ひたすら道を急ぐにぞ、皆くどくどと呟いて、

「土用前なる暑き日に朝涼の内に発ちはせず、遅く発ち出て早く留まり、日盛りにのみ歩かせられる。これはいかなる報いぞや」と託言がましく打ちわぶるを青柳聞いて眼を怒らし、

「汝ら何をかよく知るべき。暁かけて発ち出れば、山賊の恐れあり。日暮れて遅く宿に着けば、又、これ賊の恐れあり。遅く発って早く泊まるはさる災いをあらせじとてなり。もし我が事を用いずば、辛き目見せん」と息巻くにぞ、供人足らは心に恨めど勢い詮方無きままに辛くして日を重ねつつ、播磨路まで来る程に、人足らは堪えかねて、世和田、栗太夫に由を告げ、「願わくば青柳殿をなだめて、路を緩めたまえ」と言葉ひとしく頼むにぞ、世和田、栗太夫は目を見合わせて、互いに太息を付き、

「汝らしばし辛抱せよ。鎌倉へだに参り着かば、申し上げて褒美を取らせん。日頃、あの青柳が我々をすら下目に見る、面の憎さに腹は立てども、主命なれば争い難し」となだめて、その日を過ぎしけり。

かくて青柳は三世姫を守護しつつ、既にして津の国(摂津国)の兵庫に宿りを求めし。夜の暑さに耐えぬ供人足らは栗太夫、世和田らと、その宵の間に談合して、

「明日の朝は出し抜けに正明け七つに打ち発って、日の出ぬ内に三里も行くべし。砂は焦がれ石は焼ける此の暑き日にいかにして日盛りにのみ歩かんや」と早や内談を定めしかば、丑三つの頃に皆起きて、朝飯よ、破籠よと、いとかしましく罵るにぞ、青柳はひどく腹を立て、

「此は何事ぞ。今日に限って、今より発てとは誰が云い付けたる。今日の道は港川と云う川もあり山もあり、人里まれなる行く手を抱えて、夜を籠めて出る事やある。皆々寝よ」と息巻けば、栗太夫、世和田らはあざ笑いつつ臥所に隠れ、供人足らは争いかねて、蚊帳の内にぞ入りにける。

※付き付き：そば仕えの者。付き添いの者。

かくて青柳はその朝、日のいつる頃、兵庫の宿りを発ち出て、供人足を急がしつつ、港川を打ち渡して、摩耶山にぞ登り行く。此の頃の道中は今の道と同じからねば、必ず摩耶山を打ち越えるを順道としたるになん。既に山路にかかる頃は真昼になりし。水無月の空には一点の雲も無く、山には一滴の水もあらず。さらぬだに人々は辿りかねたる夏の▼旅に高き山路を越えつつ行けば、汗は流れて衣を絞り、足は火照って運ぶに物憂し。とかくして喘ぎ喘いで峠に登り着きしかば、人足どもは乗り物を松の木陰に打ち下ろし、笠を円座に汗拭きあえず、居眠るもあり、うそうそと遊び歩く者もあり、とみには行くべき気色ならねば、青柳はこらえかね、乗り物より立ちいでつつ、人足どもを呼び起こし、

「此は何事ぞ。かかる山にて、うかうかとしている事かは。汝達知らずや。この所は山賊の住処なり。さあ行かずや」と罵れば、供人足らは言葉ひとしく、  
「御身は役義を権にかうて、ややもすればはした無く我々を叱りたまえど、一日の道中にも必ず立場（休憩場）※と云う物あり。御身こそ日毎日毎に乗り物に打ち乗って、かかれたまえば、我々の身の苦しさは知りたまわじ。この所を山賊の住処などと脅したまえど、我々こそ鎌倉へ通い慣れたる者なれば、案内は良く知ったり。しばらく休息させたまえ」と答えて、立つ者ひとりも無かりしかば、青柳いよいよ腹打ち立てて、輿に付けたる仕込み杖をかい取って、地上を叩き、「起きよ、起きよ」と急がせども、一人を起こせば一人が倒れ、あなた此方と制しかね、詮方も無く見えしかば、栗太夫、世和田、衛門太はようやくそこに辿り着き、共に青柳をなだめて云う様、  
「供人足らは重荷を背負って、かかる山路を越えるなれば、ここにてしばし休まんと云うはすらすら無理ならず。させる物をば持たざりし、我々はな疲れ果てて、一足も運び難し。此の所は木陰多くて風さえ通う極楽なるに日陰の少しできるまで、憩わせたまえ」と詫びられて、青柳は止む事を得ず、  
「しからばしばし憩いたまえ、久しくはなりはべらず」と答えて、その身は乗り物に付き添って居る程に、向かいの松の木陰より、此方をうかがう者ありけり。

青柳素早と身構えて、「人々起きよ。山賊のいで来るは」と呼び立てるに、皆々慌てて起きんとする時、その者近く進み寄るをと見れば旅の女なり。

此方を見つつ声を掛け、

「人々、さのみ騒ぎたまうな。我々も旅の者にて、彼処の木陰に休みて居り。しかるに、そこに人声のするはもしや山賊かと思つて密かに垣間見たり。我々は上下合わせて七人の女連れなり。気遣われる者にはあらず」と云うに皆々安堵して、元の木陰に進んで居り、かかる所に麓の方より、一荷の酒をかき担い、峠へ上り来る者あり。遥かに見れば女にて「「あな醜、賢しらをすと、酒飲まぬ人をよく見ば、猿にかも似る」※と読みしは道理や。それは万葉の犬伴卿、これは万願寺の上諸白、下戸が飲めばそ猿に似る、猿よ猿、飲むは飲まぬにましらてふ。心の猿は狂うとも酒とし云えば咎も無し」と歌う声よく吹き送る峰の松風いざしばし、汗を入れんと峠の木陰に荷をぞ下ろしける。供人足らはこれを見て、皆諸共に談合する様、

「先の程より喉渴けども、ここらに飲むべき▼水だに無し。あの酒を買い求め、暑さをしのぐにます事なし」とて、一両人が立ち寄りつつ、酒の値を尋ねれば、酒売りの女は答えて、

「我らは日毎にこの山を打ち越え湊川の片田舎へ、卸売りをする者なり。されども買わんと宣えば、いかばかりでも売るべきなり。値は一升二百五十文、最も上酒にはべるかし」と云うに皆々領いて、

「しからば一杯買い取って、七人にて分け飲むべし。計りをよくして得させよ」と云うに女は心得て、荷蓋を取らんとする程に、青柳打ち見て声を怒らし、

「この痴れ者らがうかうかここで酒をかう事か。今の世は酒の内に痺れ薬を入れ置いて、旅人にそれを飲ませ、殺して路用を奪うと聞くに、それを知らずや」と罵れば供人足らは買いかねて、頭を掻きつつ退きける。その時その女連れは各々木陰を立ち出て、酒売り女に打ち向かい、

「先より喉が渴けども、水も無ければ唾を飲み、苦しかりしに良き物来たり。その酒少し売ってた

べ」と云うに女は頭を振って、

「この酒には痺れ薬を入れたるならんと云う人あるに、うかうかと買ったまうな」と腹立ち声して当て擦れば、旅の女子ら打ち笑い、

「それは人にもよるべきなり。我々は痺れ薬を入られたりとも苦しからず、我々は女連れにて、熱海へ湯治の帰るさ(帰り道)なり。乗り物に乗ったは大尽の御新造なるが、男の連れは気が詰まるとて、通し籠にも女子を雇って、あの三人は籠の衆なり。又、一人は荷持ちなれど、それにも女子を具せられたる。あなたも喉が渴くとよ。さあさあ」と急がして、およそ一甕三升入の片荷の酒を買い取って、水呑み柄杓を出しつつ、手に手に汲んで舌打ち鳴らし、籠に付けたる夏桃を肴に引き裂き食らうになん。乗り物の内の女ももどかしくや思いけん。早や立ち出て一つに集まり、遂に一甕三升の酒残り無く尽くせしに、籠かきの女子三人と荷持ちの女はなお足らずとて、残る片荷の甕の酒を更に五合買い取って、再びこれを飲んでけり。

※立場(たてば)：① 人足・駕籠かきなどが休息した所。② 人の多く集まる所。たまり場。

※あな醜い・・・：万葉集ノ何と醜いことでしょう。利口ぶって酒を飲まぬ人をよく見ると、猿に似ている。

その時最初立ち出て良く口をきく年増の女が銭を取り出し、酒売り女に酒の値を取らせて云う様、「和女郎は思い掛けも無き良き商いをしたる。報いに少し負けよ」と云いながら、いと大きな水呑み柄杓をその甕へ差し入れて、すくい取って飲まんとすれば、酒売り女は打ち驚いて、その手をしかと引き捕らえ、

「あれ程負けて置きたるに、その大柄杓は合入らん。そをただ飲まれてつまるものかは。由無き戯れしたまうな」と云うをば聞かで振り離ち、逃げんとするを追われる弾みに酒を残り無く、振り溢しつつ打ち笑らえば、皆々どっとはやしけり。栗太夫、衛門太、世和田も先よりこれを見て青柳に向かって▼云う様、

「あの人々の様子を見るに、思いのままに飲みたれども酒には異なる事も無し。供人足らが飲みたがるもさらさら無理とは思われず。我々とても喉渴き、耐え難きをいかにせん。許して飲ませたまえばや」と託言がましく詫びるになん、青柳も先の程より様子を見たる事なれば、ようやくに疑い解けて、恙があらじと思ひしかば云われるままに頷いて、各々さへにしか宣うをなおならずとも云い難し、「彼らが望みに任せたまえ」と云うに喜ぶ供人足らはたちまちに銭を集めて、その酒を買いわんとするに、酒売りの女はちっとも売らず、

「我が此の酒には痺れ薬を入れてあり、御身たちには売らぬなり。売らず売らず」と頭を打ち振り、荷を引き担いで行かんとすれば、女連れの旅人らは片腹痛く思う由にて、立ち替わり入れ替わり、酒売り女を説き諭し、侘びつつ酒を売らせにければ、供人足らは辛くして、その酒を買い取りつつ、水呑み柄杓に酌み取って、世和田、衛門太、栗太夫らにうやうやしくすすめれば、三人ひとしく受け飲んで、青柳にもすすめるにぞ、さすがに否とも云いかねて、只一柄杓の酒を飲みにけり。

さる程に人足らは瓜の皮に群がったる蟻の如くに立ち集い、一滴も残さばこそ、一甕の酒を飲み干しけり。その時その酒売り女は供人足らに向かって云う様、

「この一甕も三升入りにて、いずれも同じ酒ながら、あの人たちが五六合買い取りたまひし事なれば、その値をば引きはべる」と云いつつ銭百四五十文を返して、空荷を担ぎ上げ、元の山路を下り

行けば、又、彼の女連れの旅人らは残りたる夏桃を世和田、青柳らに皆与えて、酒の肴にとて贈りしかば、供人足に到るまで、その桃を分けもらいつつ、いよいよ喜びあえりける。

しばらくして、女連れの旅人らは此方を見て、からからと笑いながら、  
「汝らは既に早謀り事に陥ったり。さあ倒れよ」と手を叩けば、怪しむべし、此方の人々、供人足らは云うも更なり、栗太夫も衛門太も世和田も口中から涎を流して、身の内たちまち萎え痺れ、青柳さえも倒れ臥し、起きんとするに手足叶わず、叫ばんとするに舌回らず、眼を見張るのみにして、その恙無き者は乗り物の内なりける三世姫の他とては絶えて一人も無かりけり。

その時、その女連れの始め旅籠に乗って来たりし一人の女が走り寄り、三世姫の乗り物の戸を引き放ち、驚きたまう姫上の御手を取って出し参らせ、

「我々はこれ忠義の者なり。君が鎌倉へ送られて、義時の手に害せられたまわん事の痛ましさに救い取り奉りぬ。いざたまえ」と慰め申して、かき抱きつつ、忙わしく我が旅籠に乗せ奉る。▼

その隙に一人の女が栗太夫が背負うたる宝剣を奪い取り、

「此は聖廟の宝物なるに、義時などが病ありとて、守らせたまう事あらんや。姫上の守り刀にしばらく用いて事なる後に、彼の神社へ返すべし。しか心得よ」と罵ったり。その時又、一人の女は世和田の襟に掛けたりける文箱を取って打ち砕き、十時御前の消息(手紙)をずたずたに引き裂き捨てて、

「汝らは一人も残さず頭を刎ぬべき者どもなれども、事の源を推すときは汝らが知る事にも非ず。その罪は探題の諂いより起こるのみ。よって今その首の代わりにこの消息(手紙)を引き裂き捨てたり。冥罰思い知るべし」と、あくまで罵る程に、三人の籠かき女は三世姫を乗せ参らせし旅籠を早やもたげいだせば、仕合せ良しと女子ともに打ち連れだつて足早に麓の方へぞ下り行く。その有様を目には見つ、耳に聞くのみ人々は中氣病みに異ならず、物も云われず身も動かせず、手さえ足さえ叶わねば、おめおめとして見送りけり。

さて彼の七人の旅の女は小蝶、呉竹、薯なり、初め旅籠に乗ったるは小蝶にて、又、三世姫を奪い取って、我が旅籠に移し乗せたるも小蝶なり。又、初めに酒を買って、連れ的女子にも飲ませ、後に片荷の手を付けぬ酒を五合買いし後、一柄杓負けよとて、甕へ柄杓を差し入れて、その酒を酌み出し、追われて酒を振り溢せし者は呉竹なり。されば始めに二つの甕の酒は世の常の酒なりしを七人の女子どもが飽くまでに飲み後、片荷の甕へ呉竹が差し入れたる柄杓に痺れ薬は入れてあり、その柄杓を甕へ入れし時、薬は酒に混じりしなり。その一甕にも毒の無しと青柳らに思わせん為、更に二網、五井らが五合の酒を買って飲みたり。されば籠をかく三人の女子どもは二網、五井、七曲にて、荷持ちの女は味鴨なり。又、夏桃を世和田らが酒の肴にとて、贈りし者は薯にて、彼の酒売りに扮装たるは昼鼠の白粉なり。およそこの謀り事は呉竹の胸より出でて、事のここに及べるなり。

○さる程に青柳のみ酒を飲む事多からねば、その夕暮れに我に返って、口惜しき事限りもあらず、姫上も宝剣も奪い取られて、おめおめと太宰府へは帰り難し。自害をせんと思ひ定めて、そは崖に赴きつつ、懐剣を引き抜いて、喉へ突き立てんとしたりしが、たちまち思い返す様、

「信種主はわが為に相恩※の主君に非ず。さるをここにて犬死にせば、亡き親たちへ不孝なり。まず身を隠して、後に又、明かりを立つる時もあらん。そうじゃ、そうじゃ」と刃を収めて、元の所へ立ち帰り、倒れ伏したる栗太夫、世和田らを睨まえて、

「汝らは我が云う事を用いず、賊の為に落とし入れられ、我儕を巻き添えせし事なれば、今汝らを斬り殺して、我も自害をすべけれども、いささか思う由あれば、このままにして立ち別れん。覚えていよ」と罵って、仕込み杖を突き立てて、東の麓へ赴きつつ、行方も知れずなりにけり。

※相恩(そうおん):主君・主家などから代々恩義を受けていること。

○かくて栗太夫、衛門太、世和田らは供人足と諸共にその夜丑三つの頃おいにようやくに酒毒醒めて、▼いかにすべきとばかりに呆れ果て、更に思案にあたわず、青柳がとにかくと云いつる事を聞かざりし、後悔の他無かりけり。その時人足の小賢しき者が進み出て、

「殿輩思いたまわずや、「身に付く火をば払い落とし、損代には人をいませ」☆と云うことわざも候に、青柳殿は逐電して、ここに居たまわぬこそ幸いなれ。皆彼の婦人に塗り付けて、言い訳をしたまえかし」と云われて喜ぶ三人はやがてその儀に任しつつ、衛門太をばそのままに鎌倉へ遣わして、執権にこれを訴え、栗太夫、世和田らは日を経て、筑紫に帰りつつ、

「さても青柳は主君の御恩を受けながら、謀反人らと心を合わせ、斯様斯様の所にて、我々をも謀って、痺れ薬を入れたりし酒を飲ませて気絶させ、三世姫をも宝剣をも奪い取って逃げ失せたり。我々が彼女に謀られたる落ち度を優免※ましまして、青柳を絡め捕り、罪を正させたまえかし」と真空言打ち混ぜて、我良き様に訴えけり。されば又、青柳が摩耶山より影を隠して、その後の物語りは第四編に著すべし。又来る春を待ちたまえかし。目出度し、目出度し。

※損代(そんだい):人に与えた損失を償うための代償。損料。 ※優免(ゆうめん):大目にみて許すこと。特別に免除すること。宥免。

<翻刻、校訂、翻訳:滝本慶三 禁転載 底本/上秩:早稲田大学図書館、下秩:私蔵本>